ワン・アイズ・クロウ・ウィズ・ワンス・サマー

ターキー1977

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スリケンが飛び交い、ＩＳが宙を舞う。一人の教師が消え、キョート共和国とＩＳ学園を舞台にニンジャの恐るべき陰謀が蠢く。

それに挑むは一人の少年と五人の少女。そして……ＺＢＲ中毒の私立探偵。

「片目のカラスと二つの夏」の戦い！　ニンジャスレイヤー×ＩＳクロスオーバー！

目次

#1 1
#2 12
#3 27
#4 41
#5 55
#6 70
#7 85
#8 99

#1

◆注意◆本作はニンジャスレイヤー本編のツイッターアー更新の文体へのリスペクトとして、地の文と台詞が一体化した独特の文体となります。また、ニンジャスレイヤー未読の方には一見誤植に見えるような独特のタームや叫び声等が多々出てきます。これは『忍殺語』と呼ばれる独特の言葉です。ご了承ください◆注意◆

◆開幕な◆

ワン・アイズ・クロウ・ウィズ・ワンス・サマー　#1

それは古代ローマのコロッセオを思わせる空間であった。直径２００ｍほどの円形のフィールドと、それを囲むように築かれた観客席。軽く１０００人は収容できるであろう客席の大半は空席で、その片隅に数十人が座っているのみである。居るのは全員が女性、それもほぼ全員がハイティーンの、まだ若い少女たちだ。

彼女らが眺めるアリーナに二人の人影あり。一人は競泳水着めいたタイトなボディスーツに身を包んだ、金髪をショートに整えた少女。小柄ながらその胸は同世代の少女と比べやや豊満である。もう一人は少年。やはり競泳水着めいたタイトなスーツで上下を覆っており、片手には小手が装着されている。

客席に座っていた一人が立ち上がり、手を挙げた。他のボディスーツ姿の少女達よりやや年上の女性。サイズが合っていないクリーム色の服をだぼつかせている姿は持前の緩い性格を伺わせるが、大きめの眼鏡の奥の瞳は真剣な教師のそれだ。「ハジメ!」手を振り下ろすのを合図に、アリーナ内の二人は身構えた。

先に動いたのは少年の方だった。「イヤーッ!」気合の込められた声と共に小手からホタルめいた光の粒が巻き起こり彼の全身を包む。光の粒は瞬く間に白いアーマーを形づくり、少年を護るヨロイと化した。鋭角の多い装甲によって彩られたそれは、まるでカートゥーンに登場するシャープなデザインのパワード・スーツだ。

「イヤーッ!」ほぼ同時に少女も声を上げた。胸に付けられたクロス型のアクセサリから同様の光の粒が巻き起こり、少年よりも早い速度でヨロイを形作る。少年の白のヨロ

イに比べてやや武骨な印象を与えるオレンジのヨロイ。手足こそアーマーに包まれているが、ボディは胸元を僅かに覆うだけでほぼ剥き出しの状態だ。

しかしこれは着用者の危険性を意味するものではない。一見剥き出しに見える箇所も、不可視のシールドによって守られている。その防御性はヨタモノのナイフを防ぐ程度ではない。機関銃の掃射どころか、緊急であればミサイルの直撃すら耐えうる代物である。それが彼ら、彼女らの使用するＩ・Ｓ――――インフィニット・ストラトスのシールド防御なのだ。

「イヤーッ！」少年の身体が〝飛翔〟した。アリーナの砂を蹴り、十数メートルの高さまで浮き上がる白いヨロイ。それに対し少女のオレンジのヨロイは接地したまま迎え撃つ体勢。「イヤーッ！」オレンジのヨロイの腕部に光の渦が巻き起こり、１秒も経たずにガトリング砲を形作った。激しい砲火が白いヨロイを襲う。

「イヤーッ！」それをアクロバット飛行めいた動きで回避しつつ距離を詰める白いヨロイ。その右手にはライトセーバーを思わせる赤い光の剣が形作られている。２００メートル程あった両者の距離が急速に縮まる。「イヤーッ！」少女は素早くガトリング

砲を捨てると次の武器を形成した。右手にブレード、左手にショットガン。

「イヤーッ！」「イヤーッ！」両者の刃が切り結ばれる。その瞬間を狙って、白いヨロイの腹部に容赦ないショットガンの接射が撃ち込まれる！「うおっと！」少年は焦りの声と共に深く打ち込む寸前に身を引いた。シールドで受ければエネルギーが減る。少年の機体は燃費が悪い。無駄なダメージは抑えなければならない。

「動きが鈍いよ、イチカ＝サン！」少女の叱咤するような声。少年の態勢が崩れた今を好機と捉えたか、地を蹴り高速で体当たりを食らわせる。肉弾戦の距離。剣を扱うには逆に難しい間合いだ。「まだだ！」イチカと呼ばれた少年はそう言うと速度を上げ、再び間合いを剣の距離まで戻した。性能的には白いヨロイが上なのだろう。その速度は実際ハヤイ。

今こうして展開しているトゥーンめいた光景は電脳上の仮想空間での出来事でも無ければ、ＳＦ映画の撮影でもない。れっきとした現実での光景である。ではこれは何なのか？　それを説明するには、まずＩＳという宇宙開発用強化外骨格――――として開発され、現在は「兵器」として見なされている――――について説明せねばならないだろう。

「適性」さえあれば手足のように操縦可能で、平時はアクセサリ程度のサイズに粒子化でき携帯可能。恒星間移動も理論上可能とする速度と機動性、隕石すら耐えうる防御性、そして現行兵器を凌駕する火力を並立しうる、自己成長の可能性すら持つ超技術――――自称天才工学博士、シノノノ・タバネが突如として学会に提示したそれは当初、宇宙開発同様の稚気じみた夢物語として物笑いのタネとなった。

だが、それが物笑いで済んでいたのはひと月程度の僅かな間であった。日本以外の世界各地に突如として現れた純白のＩＳ、通称「シロキシ」による日本に向けられたミサイルの撃墜と各国の精鋭部隊の圧倒。それは傲慢な態度の学者を二桁以上ドゲザさせ、少なくない数の国の防衛責任者をケジメ、あるいはセプクに追いやった。

その後、諸外国の思惑が交錯する中でキョート・リパブリックに訓練施設が造られた。それが今、彼、彼女らが戦う複数のアリーナを含めた巨大学園・通称ＩＳ学園である。当初は日本の首都であるネオサイタマに設置が検討されたが、ネオサイタマは表向き磁気嵐を理由に鎖国制度を敷いている。故に、海外との窓口のあるキョートが選ばれた。

また、治安上の理由もあった。ネオサイタマは世界屈指のサイバネティックス技術を持つ都市であり、同時に世界屈指の犯罪都市でもある。比べてキョートはアンダーガイオンに下がりさえしなければ安全は保たれている。高いＩＳ適性を持つ人間は貴重である。送る諸外国からしてみれば、リスク回避の思惑もあったのだ――――少なくとも、先ごろの大崩壊「キョート・アポカリプス」以前は。

ＩＳ学園はキョート沿岸部、キョート・ライン川の流れ着く先に半島のように造られた人工島に建造された巨大学園だ。直径２００ｍのアリーナはＩＳの実践演習場であり、それが複数。更に通常授業に使われる三学年分の教室、巨大食堂、各部活動のための部室棟、学生寮、更にはタバネ博士が失踪した事で半ロストテクノロジー化したＩＳ技術を研究・整備するための施設まで収まっている。

そして、この学園を語る上で避けて通れないのが先程から度々挙がる「適性」についてである。その条件とは、女性である事。ＩＳは何故か男性には一切反応せず、女性の、更にＩＳ適性を見せた者のみ扱える存在だったのだ。この要因については各国機関が最優先事項として研究を進めているが、未だにそのブラックボックスだけは解明されていない。

ここで賢明なる読者諸氏はこう思われるかもしれない。「女性しか扱えないならば、あのアリーナで戦っている少年は何なのか？　トランスジェンダーなのか？」その疑問は当然である。そして、それが彼、オリムラ・イチカが唯一の男性生徒として在籍している理由でもある。彼は――――イレギュラーなのだ。彼は男性で唯一、ＩＳ適性を持つ存在なのである。

厳密にはそれは「ある人物」の気まぐれめいた作為的なものだったのだが、それについてここで語る事は伏せておこう。ここで言える事実は、イチカがこの学園に「常駐している」唯一の男性として存在しているという事だけである。

「イヤーッ！」「ンアーッ！」数度目の剣合わせでイチカが押し勝った。苦悶の声を上げ少女、シャルロット・デュノアが弾き飛ばされる。「くっ……！」右手のブレードがパージされ、また新しい武器を形作る。パイルバンカー、精度こそ必要だが、零距離からであれば相手のシールドを全て消費させダウンに追い込める彼女の必殺武器。

さて、イチカを「常駐している唯一の男性」と示した通り、それ以外の出入りする人

間が全て女性という訳ではない。食料や雑貨を搬入するドライバーや業者、また清掃業者などは女性だけという訳にもいかず、男性も（学園側からすれば渋々ではあるようだが）学園内に入る事は認められている。アリーナの物陰でモップを擦る清掃員もそうだ。

「……」清掃員は黙々とモップを動かしている。何とも清掃員らしくない清掃員であった。身長は２ｍ近く、おそらくは３Ｌはあるだろう清掃服が窮屈に感じられる程に筋肉が浮かび上がっている。帽子の間から除く髪は完全に白く、頬には深いほうれい線が刻まれている。何より特徴的なのは、右目を隠す眼帯と額に付けられた大きなバンソウコウだ。

「あの、ヤマダ・センセイ。わたくし花を摘みに行きたいのですが、宜しいでしょうか？」観客席に座る生徒のひとり、長いブロンドにウェーブを優雅にかけた少女、セシリア・オルコットが手を挙げた。その胸は豊満である。「花を摘む」とは、女性が用を足す時の奥ゆかしい表現だ。「はい、大丈夫ですよ。オルコット＝サン」名を呼ばれたヤマダ・マヤは頷いて彼女を促した。

「アリガトウゴザイマス」優雅に礼をすると、セシリアは内心の焦りを見せずにあくまでゆったりと一団から離れ、歩き出した。その様子を見て清掃員がモップを肩にかけ、バケツを手に移動してゆく。「……」客席から離れ、セシリアは薄暗い廊下を進む。反対側から歩み寄る清掃員。「ドーモ、ガンドー＝サン」「ドーモ、セシリア＝サン」

二人はタタミ一枚の距離で立ち止まり、アイサツを交わした。古事記から伝わるアイサツはどのような時でも絶対の礼儀だ。「ＩＳ同士の試合ってのは初めて見たが、派手なモンだなァ。まるでカートゥーンのＳＦ映画だ」「いつもなら二人とも、もっと激しく撃ち合っていますわ。心ここに在らずという感じですわね」顎を摩りつつ言う清掃員に、セシリアは心配を織り交ぜて答えた。「……それで、どうですの？」

緊張した表情で尋ねるセシリア。それに対し、ガンドーと言われた清掃員は彼女を見据えて答えた。「……早ければ数日以内にこっちに襲撃が来る。そこがおそらく唯一の救出のタイミングだ」「無事は確認できまして？」「ああ、大したもんだ。自分の置かれている状況そっちのけでイチカ＝サンの事を心配してた。『助けに来るな』だとよ」

「あの方らしいですわね」呆れ混じりにセシリアが言った。清掃員が言葉を続ける。「い

いか、無理はするな。相手はニンジャで、しかも未知数のニンジャ用ＩＳ付きだ。仲間を逃がし、時間を稼ぐ事だけ考えろ」「言われるまでもありませんわ。イチカ＝サンと添い遂げるまで死ぬつもりはありませんもの」「ハハッ」軽く笑う清掃員。「それだけ言えりゃあ安心だ」

「今の件、了解しました。イチカ＝サン達にも伝えておきます。ラウラ＝サンにはよろしくお伝えくださいな」「ああ、直前になったらまた連絡する。それまでは腕を磨くのに専念しておいてくれ」「お気をつけて、オタッシャデー」「オタッシャデー……」別れのアイサツを短く交わし、二人はそのまま視線を合わせずにすれ違った。

「……ハァ」セッションを終え、セシリアはため息をついた。アンダーガイオンの、それも薬物中毒者の探偵と協力して不法侵入の手助け。本土の家族が知ったら勘当は確実だろう。とはいえ、これ以外の手段はない。突如としてセシリア達の前から姿を消した、あの女性を救い出すためには。「……お待ちくださいませ、オリムラ・センセイ」そう呟き、セシリアは歩き出した。

何故このような事態になったのか？　それはこれより二週間前、突如消えた姉を追

い、ガンドー探偵事務所に来た少年が誤解から事務所を半壊させた所まで遡る――

＃２

キャバァーン！　キャバァーン！　ＩＳ学園教員用のカスタムＵＮＩＸがジングルを鳴らす。「……確かに」モニタに表示される振込額を確認し、黒スーツ姿の長身の女性が頷いた。長い黒髪は無造作に後ろで纏められているだけだが、それが逆に鋭さを備えた彼女の顔立ちと相まってどこかサムライめいたアトモスフィアを漂わせている。その胸は豊満である。

「我々が貴女をどれだけ必要としているか、これで分かって頂けたかと思うのですが、チフユ＝サン？」彼女の正面、応接室のクリスタル製チャブを挟んで座る二人の女。その右側の白衣の女性が言った。サイバーサングラスによって目元は隠されているが、まだ若い。首筋に植え付けられているＩＲＣ端子を神経質そうに時折撫でている。その胸には国内最大の製薬会社、ヨロシサン製薬研究員のバッジ。

「……」その横に座る紺のスーツ姿の女性は何も言わずただ彼女、オリムラ・チフユに視線を向けた。チフユはその視線を受けただけで室内の温度が下がったような錯覚を

受けた。黒髪を丁寧に結わえたその女性は年齢の程は分からない。口元はメンポ（訳注・面頬）で覆われ、その瞳はどこまでも冷たい。

メンポ？　メンポと言ったか？　おお、ではまさかこの女性は！　まさかニンジャだと言うのか!?「……返答を」スーツの女性はハスキーな声でチフユに問いかけた。「……分かった。応じよう」僅かの逡巡ののち、チフユは頷いた。「だか、今日の授業だけは今から代用が効かない。それからで頼む」

「駄目だ。タイム・イズ・マネー」スーツ女は不快そうに眉を歪めるとコトワザを引用しつつ首を横に振った。高いインテリジェンスを持っている証拠だ。「……分かりました。その位は良いでしょう」しかし、白衣女がそれを否定した。「チィーッ……」スーツ女は不機嫌そうにしながらも何も言わない。二人の関係は白衣女の方が上のようだ。

しかしチフユの表情の険しさは消えなかった。この流れが最初から予定されていた〝良い警官、悪い警官〟メソードである事を見抜いているのだ。「ただし、午前中の授業だけです。午後の授業の替えは用意してください」白衣女は優し気に言う。あからさまな表面上の優しさ。「アリガトウゴザイマス」それでもチフユはあくまで奥ゆかしく礼

を返した。

ワン・アイズ・クロウ・ウィズ・ワンス・サマー　＃2

オリムラ・イチカは思い出す。振り返れば、その日の授業は何かが違っていた。

「……遅いな、チフユ・ネエ」ＩＳ学園第三アリーナ。１年１組・２組合同のＩＳの実践演習に集まった少女たちの中でイチカは呟いた。授業開始時間の５分前を切ったというのに、未だに教官であるチフユが現れないのだ。ちなみにチフユ・ネエとはイチカが姉のチフユを呼ぶ時の愛称である。親しい仲や家族であれば、これはシツレイにはあたらない。

賢明なる読者諸氏は既にお分かりの事かと思うが、イチカとチフユ、この二人は姉弟の関係である。チフユはＩＳの開発者であるタバネの旧友であり、ＩＳの初期発展を支えた日本人適合者であり、そして模擬戦闘スポーツとして開かれたＩＳ世界大会『モンテ・グロッソ』初代王者でもある。その存在はＩＳを操る全ての少女の憧れなのだ。

「イチカ＝サン、何をボーッとしている？」イチカに鋭い口調の声が飛んだ。見れば長い黒髪を黄色いリボンで結んだ少女が咎めるような目つきでイチカを見ている。「ホウキ＝サン。いや、チフユ・ネエが遅いなと思って」「……確かに、センセイにしては珍しいな」言われて気付いたのだろう。ホウキと呼ばれた少女は周囲を見回した。そのバストは豊満である。

彼女の名はシノノノ・ホウキ。日本人ＩＳ適合者のひとりであり、イチカの幼馴染であり、更にまた賢明な読者諸氏はお気づきであろう。彼女はＩＳ開発者であるシノノノ・タバネの妹でもある。超重要人物として様々な機関からマークされる中で色々とあったのか、ホウキとしては姉に思う所があるようだ。姉の方は過剰なほどホウキを可愛がっているのだが。

「すまない、遅くなった」アリーナの選手入場口からの声。そちらに振り向いた生徒たちは一様に息を呑んだ。チフユは実践授業でも平時の黒スーツのまま行っていた。しかし今、彼女らが目にしたのは……訓練用ＩＳ「ウチガネ」を身に纏い、競泳水着めいたスーツを着たチフユの姿だった。その胸は形よく豊満である。

「キャーッ！」「オネーサマ!!」「ステキー！」生徒たちから黄色い歓声があがる。チフユに特に強い、あるいは特殊な憧れを持つ少女たちの声だ。「チフユ・ネエ!?　どうしたんだよ、その格好!?」「イヤーッ！」「グワーッ!?」問いかけたイチカは、突然チフユに出席簿で殴られた。「……オリムラ・センセイだ。お前のニューロンはトーフ製か？」

「……オ、オリムラ・センセイ。その格好はどうされたんですか？」理不尽な痛みを堪えつつ、イチカは再度尋ねた。「ああ……今日は1組と2組の生徒を織り交ぜた実践演習を予定していたが、それを変更する」「変更？」怪訝な顔をするホウキ。レジュメを徹底的に組んでから授業を行うのがチフユの教え方であり、今までアドリブでの変更は無かった。

「特別授業だ。今日は私が相手をする！　何なら二人がかり、三人がかりでも構わん。お前たちがこれまで積んできたカラテを、全てぶつけてこい！」「キャーッ！」「ヤッター！」割れんばかりの歓声が生徒から巻き起こった。入学以来の、教官として指導こそすれチフユと直接戦闘する機会は無かった。それ故に興奮する生徒も多い。

なお、ここで彼女が言うカラテとは格闘技としてのカラテを示すものではない。カラ

テとは概念であり、ミームであり、精神の在り方である。日々の過酷な鍛錬で積み重ねられた経験や鍛えられた体や心、それらが一体化してカラテという形となり、その者の中で積み重なる。そして実戦において、カラテをより積んだ者が勝つのだ。

「ほ、本当に勝負していただけるのですか!?」眼帯を付けた銀髪の小柄な少女。ラウラ・ボーデヴィッヒが開いた右目を輝かせて言った。そのバストは平坦である。ドイツ軍特殊部隊出身の彼女は、ＩＳ学園入学前に彼女の教えを受けドロップアウト寸前から部隊長に返り咲いたという過去がある。それだけに彼女への憧れは一際強い。

「ああ、遠慮せずにかかって来い」「……はい！」ラウラは、平時は生徒の中でも極めてクールな存在である。それがここまで興奮している事に、イチカは彼女にとってのチフユの存在の大きさを改めて知った。「センセイ……まさか手合わせできる機会が来ようとは」サムライの気質の強いホウキも、戦意が高まっているようだ。

一方、それとは異なる意味で戦意を燃やす者もいた。「これは……チャンスですわね」「……だね」セシリアとシャルは何時になく表情を引き締め、視線を交わした。「ちょっと、何を言ってんのよ?」髪を左右で結んでいる中国系の少女が二人の様子に気付いて

声をかけた。彼女はファン・リンイン。通称リン。イチカのもう一人の幼馴染でもある。その胸は標準的である。

「分かりませんの？　リン＝サン？」まるで分っていない事が信じられないようにセシリアが答えた。シャルが頷く。「ここでオリムラ・センセイに一太刀でも与えられれば、センセイに実力を認めて貰える」「そしてオリムラ・センセイはイチカ＝サンに最も影響を与える事ができる人物……もう、お分かりですわね？」「!?」リンは息を呑んだ。

　他人の恋愛沙汰に口を挟むのは奥ゆかしくないが、彼女らのモチベーションの高さの理由を語る上で触れねばならないだろう。先に述べたようにＩＳ学園は生徒の９９％が女性であり、イチカはその中で唯一の男性である。故に何かと女子から意識されているのだが、中でもホウキ、セシリア、シャル、リン、ラウラ。この５人からは強い恋愛感情を向けられている。

　そのアプローチは時に奥ゆかしく、時に積極的。５人が各々でイチカの興味を引こうと奮闘する時もあれば、協力して行動する時もある。それはユウジョウでもあり、同時にライバルでもある。恋に恋する年ごろの少女たちとはいえ、そのエネルギーは実際凄

まじいものがあった。

しかし、肝心のイチカはそれに気付いていない。この少年は自分から意識した時には些細な事でも動揺したり興奮したりするのだが、そうでない時に他人から向けられた感情にはボンズ（訳注・坊主）めいた無関心でスルーしてしまうのだ。それでキアイを込めた作戦が空振りで終わってしまった事も少なくない。

「ショーグンよりその馬を射る方が簡単」とはミヤモト・マサシの格言である。チフユは彼女らがイチカの事を好きだと知っている。ならばここで彼女に実力をアピールする事でイチカへのアピールへの近道になるのでは？　セシリア達はそう考えたのだ。

「……ねえ、一時休戦といかない？」リンは顔を近づけ、二人に神妙に申し出た。

「幸いラウラ＝サンとホウキ＝サンは勝負できる事で頭が一杯で、この事に気付いていませんわ」「ボク達三人で……」「打倒、チフユ＝サン同盟結成ね」三人は顔を近づけたまま見合わせ、頷き、手を重ねた。提案者であるセシリアが先手を打つようにその手を挙げ、名乗りを上げた。「セシリア・オルコット他二名、三人で挑戦させて頂きますわ！」

「イヤーッ！」「「ンアーッ！」」セシリア、シャル、リンの三人は悲鳴と共に吹き飛ばされた。試合開始の合図から3分での出来事である。一方のチフユは汗一つかかず、物理ブレードを手に吹き飛ばされた三人を見て叱咤するように言った。「お前たち、ただ一緒に攻撃を仕掛ける事をチームワークと勘違いするな！」その表情には厳しい怒り。

「オルコット＝サン！　お前の機体『ブルー・ティアーズ』の特性は!?」「ハ、ハイ！　ビット『ブルー・ティアーズ』よる多方向からの同時攻撃と、大型光学兵器による遠距離戦特化ですわ！」「ならば何故、デュノア＝サンより前に出た？」「う……」セシリアは言葉を詰まらせた。シャルやリンより自分を目立たせようと思ってしまった結果だ。

「ビットにしてもそうだ。フレンドリーファイアを恐れて十分な攻撃を仕掛けていなかったな？　より精度を上げ、仲間が組み打つ隙間を撃ち抜けるくらいになれ」「ハイ……」「デュノア＝サンは切り替えがまだ遅い。選択肢の多さがお前の機体の強みだ。それに自身が振り回されるな」「わ、分かりました……」ふらつきつつ起き上がるシャル。

「ファン＝サン。リュウゲキホウの不可視の砲身はスペックを知っている者は当然警戒する。そんな一辺倒のタイミングではなく、リズムを崩すように撃て。でなければ今の

ようにあっさりと読まれるぞ」「ハ、ハイ～……」ひっくり返ったままリンは答えた。「全く……こんな事ではイチカ＝サンはやれんな」「「!?」」

そう言うチフユの口元には僅かな笑みが浮かんでいる。セシリア達の思惑は完全に読まれていたのだ。「か、完敗ですわ……」「もっと訓練しないとね……」「クヤシイ……！」「次は!?」「ラウラ・ボーデヴィッヒ、行きます！」他の女子が手を挙げる前にラウラがチフユの前に出た。既に彼女の専用ＩＳ「シュヴァルツェア・レーゲン」が展開済みだ。

「ヨロシクオネガイシマス」「ヨロシクオネガイシマス」「イヤーッ！」「イヤーッ！」アイサツからコンマ０．５秒後、シュヴァルツェア・レーゲンのワイヤーブレードが複雑な軌跡を描き、チフユの死角から攻撃を仕掛けようとする。しかしチフユは難なくそれを回避する。その攻防を、イチカは女子の一団からやや離れたところで眺めていた。

いくらＩＳ王者のチフユでも、２クラスの全生徒を相手にするとなると時間が足りなくなるかもしれない。それであれば対戦希望の女子に順番を譲り、自分は戦わずとも良いだろうとイチカは考えていた。自分が相手なら、チフユは容赦なくを叩きのめすだろ

うと想像したというのも理由のひとつである。

だが、それだけではない。この授業に対するチフユの態度にイチカは違和感を覚えていた。何か普段のチフユと違う。何かが。「イヤーッ！」「ンアーッ！」「フウラ＝サン、ＡＩＣの狙いが視線で丸わかりだ。フェイントを絡めなければ一級の世界では逆に誘導されるぞ」「アリガトウゴザイマシタ！」そう考える間に勝負は終わっていた。「次！」

「シノノノ・ホウキ、お願いします！」ホウキが前に出た。どうやらチフユは本気で２クラス数十人の相手をするつもりのようだった。「ヨロシクオネガイシマス」「ヨロシクオネガイシマス」「イヤーッ！」「イヤーッ！」瞬く間に勝負がつく。「ンアーッ！」「ホウキ＝サン、アカツバキの性能と機能に頼りすぎだ。頼るのでなく、使いこなせるようになれ」

それでいて見事なのは、誰が相手でも単純に倒しているだけではない。ちゃんと相手に先手を取らせて、それを受けきり、相手の弱点を突いて勝っている。（まるでスクールでなくドージョーのセンセイだ）イチカはそう思いつつ、礼をするチフユとホウキを見ていた。「次！」更に次々と挑む女子たち。誰もチフユのＩＳに傷ひとつ与えられてい

ない。

「……次！」授業時間残り5分前で、本当にチフユは2クラス全ての女子との組手を終えてしまった。その視線は当然のようにイチカに向けられている。首を横に向け、露骨に視線を避けるイチカ。「……何をやっている」「センセイ、俺は見学中に首を寝違えたので試合は遠慮しておきます」「生身にブレードを食らいたいか？」容赦ない言葉。

「治りました」チフユの声の響きに本気を感じ取り、イチカは素早くチフユの前に進み出た。右手のコテから光の粒子が迸り、イチカのＩＳ「ビャクシキ」を形作る。ビャクシキはシールド無効化剣、可変型エネルギー固定装置等を搭載したオーバースペック機だが、その代償として恐ろしく燃費が悪く、満タンから数分でエネルギーが枯渇する。ピーキーな機体だ。

「ヨロシクオネガイシマス」「ヨロシクオネガイシマス」「イヤーッ！」アイサツ直後、イチカの姿がかき消えた。ＩＳのブーストを最大限に活かした瞬間加速だ！　「イヤーッ！」ビャクシキの武装は二つしかない。その内のひとつ、特殊ブレード「ユキヒラ弐型」を手にチフユの懐に潜り込み横薙ぎに切り払った。手ごたえは……無い！

「アイエッ!?」混乱するイチカ。その眼前にチフユの顔。「エ？」「そう来ると思っていた。イヤーッ！」「グワーッ！」イチカは腹部に強烈な蹴りを受け、後方に吹き飛んだ。シールドで肉体にはダメージこそ無いものの、無視できぬシールド消耗だ！「くっ！」イチカは咄嗟に姿勢制御を行い、再度チフユに突撃しようとする。

「!?」だがチフユは吹き飛ばされたイチカの動きに追随していた。ぴたりと距離を保ち、彼の横を飛んでいる。「初手の奇襲を仕掛けるならもっと変則的な動きをしろ。バカモノ」「……何なんだよ、チフユ・ネエ!?」堪らずイチカは勝負中だというのにチフユに問いかけた。「何か変だ、今日のチフユ・ネエ。何か……焦ってる」

「イチカ……!?」そのイチカの何気ない言葉はチフユに衝撃を与えたようだった。僅かに動きが止まる。「イヤーッ！」その隙を逃さず、イチカはユキヒラ弐型を打ち込んだ。「ンアーッ！」初めてのダメージ。距離を取るチフユ。更に追撃しようとイチカが追う。

　チフユはウチガネのブレードを振り、ユキヒラ弐型と組み合った。「……イチカ」息のかかる距離。チフユはイチカに他には聞こえない程の声で言った。「イチカ、私はしば

らく居なくなる。皆に何かがあったら、お前が守ってやってくれ」「チ、チフユ・ネエ!?」彼女とは思えない弱気な言葉。イチカは動揺を隠さず問い返そうとする。「イヤーッ!」「グワーッ!?」

だが、それ以上イチカが問いかける事はできなかった。動揺で動きが鈍ったところに、ウチガネのブレードが的確に打ち込まれる。半ば墜落するようにイチカはアリーナの砂に着陸した。「……」その姿をチフユは上空から無言で見下ろした。まるで別れを悲しむような顔で。

ゴーン、ゴーン、ゴーン。授業終了のチャイムが鳴る。「私は次の予定があるのでこのまま退席させてもらう。ヤマダ・センセイに後はお願いしているので、指示に従うように。オツカレサマデシタ」『オツカレサマデシタ!』チフユの合図で一斉に礼を返す生徒たち。チフユはＩＳを装着したまま、アリーナの観客席に向かう。そこに居る二人の女性。

「チフユ・ネエ……?」仰向けのままイチカが呟く。二人の女性はチフユと二言三言話をすると、彼女を伴ってアリーナを退出していった。

そして、オリムラ・チフユの姿はＩＳ学園から消えた。ガンドー探偵事務所が半壊する日の、更に二週間前の出来事である。

＃3

「エー、それでですね、オリムラ＝サン」高級そうな家具と共に「ミツケル探偵社」「江戸時代からの伝統」「クレーム率１％以下」「つまり９９％の顧客満足度」「最優秀探偵社賞受賞」「発見」などの勇ましいショドーが並ぶミツケル探偵社のオフィス。その応接室でイチカを前にする担当者はショドーとは対照的に言いづらそうな、落ち着かない態度で口を開いた。

「貴方から依頼された、エー、オリムラ・チフユ＝サンの捜索についてですが、その、全力で調査させて、いただいたのですが、エー、当社ではご期待に添えないようでして」「エッ？」イチカは驚いて聞き返した。ミツケル探偵社はこのアッパーガイオンでも有名な探偵社であり、ＴＶＣＭなども積極的に行っている会社だ。その分、依頼料は実際高い。

　その時に対応したこの担当者は自信ありげに「この程度の捜索はベイビー・サブミッションですよ」とイチカに対して言い切ったのだ。僅か数日での態度の豹変に、イチカ

は納得できない表情で聞き返した。「どういう事ですか？」担当者としてもそう言われるのは覚悟していたのだろう。懐から出した封筒をチャブに置き、半ばドゲザするように頭を下げた。

「勿論、こちらの実力不足でしたので依頼料は全額お返しいたします。スミマセン！」

「……」全く説明になっていない。まるで細かい説明なしでイチカに納得して帰って貰おうとしているようだ。とはいえ、担当者の焦りは本物である。おそらくは彼も上から指示をされているのであろう。これ以上追い詰めればケジメも有るかもしれない。

「……分かりました。他を当たってみます」流石に他人の指がケジメされるのは良い気分はしない。イチカは不満を顔にありありと残しながらも、封筒を受け取った。「スミマセン」担当者は顔を上げ、僅かに迷いつつも小声で言った。それは最後に残った、彼の探偵としての矜持か。「……他所を当たっても、無駄です。少なくともアッパーの探偵では」

「エ？」「……イイエ、何でもありません」担当者はかぶりを振ると、今度こそ何も言わなくなった。イチカは怪訝な顔のままミツケル探偵社を出て、ＩＲＣ端末から別の探偵

社を検索して歩き出した。既に姿を消して１０日以上経つ、姉のチフユを探すために。

……その担当者の言葉が本当だったと知るのは、その日の内に三社の探偵社からイチカが門前払いを食らった後である。

ワン・アイズ・クロウ・ウイズ・ワンス・サマー　　＃３

「ん？　イチカ＝サン、出かけていたのか？」ＩＳ学園内の学生寮。ケンドーの鍛錬を終えて戻ったばかりのホウキは、大きな紙袋を抱えてエントランスから入って来たきたイチカを見かけて尋ねた。「あ!?　あ、ああ……ドーモ、ホウキ＝サン」あからさまな動揺を見せるイチカ。「……何だ、その紙袋は？」

「な、何でもない。それじゃ……」小走りにホウキの横を抜けようとする。その時、劣悪パルプで造られていた紙袋がピリピリと破れ、中身がバラバラとこぼれ落ちた。全て本だ。「アッ！」原色で彩られた毒々しいカラーの本が多い。ホウキは何気なく一冊を手に取ると、その顔を急激に赤くさせて叫んだ。「イ、イチカ＝サン！　何だこれは!?」

ナムサン！　そこに描かれているのはヘンタイ・セル調で描かれた半裸のマイコではないか！　「ちょ、ちょっと待ってくれ、ホウキ＝サン！」必死に落ちた本を拾い直しつつ弁明するイチカ。ホウキは紅潮したまま手にした袋からシナイを取り出し、構えた。シナイとはバイオバンブーで造られた、安全性重点の作りの模擬刀の事だ。

「そこに直れ！　ここで私が成敗してくれる！」「だから」「イヤーッ！」ホウキのシナイがイチカを打ち据える！　「グワーッ！」しかしイチカはそれに耐え、ホウキの手にした本以外を持ち直すと廊下を走る！　「待て！」「すまない、後で説明する！」言い訳を残し、イチカはそのまま走り去った。「……」追うのを諦め、ホウキは手にした本を改めて見た。【アンダーガイオン中層の歩き方】

……３０分後！

「どういう事ですの、これは!?」ホウキの部屋の中、セシリアは大声で言った。「失敗しないマイコセンター選び」「アブナイ！　行ってはいけない誘拐頻発地帯」「実際安い合法ドラッグ販売店」「エッ無料で前後!?　悪用禁止裏技」「おいしいお肉を食べるには」等の煽情的な見出しが踊る先ほどの本が手元のチャブに広げられている。

ここでキョート・リパブリックに住んでいない。あるいは旅行した事の無い読者諸氏にアッパーガイオンとアンダーガイオンについて説明しておこう。キョートの地下には逆ピラミッド型の地下都市が広がっている。地上がいわゆるアッパー、地下1層～3層がアンダー上層部、4層～9層がアンダー中層、それ以下が下層だ。

アッパーガイオンは完全に整備された景観と緑豊かな街並み、伝統を感じさせる風情を残す美しい街並みだ。建物の高さも景観を乱さないために厳しく制限されており、ウグイスが鳴き、川にはバイオカモが泳ぐ。ここに住むのはキョートの中でも上流階級に限られ、一般民はアッパーで働くだけでも相当な資金と運を求められる。

しかし大型リフトエレベーターで下層に下りると、そこにはネオサイタマの繁華街もかくやと言わんばかりの繁華街が広がる。これがアンダーガイオンである。元々は高さ制限で上に広げられない建物を下に伸ばすという発想だったのが、やがて地下都市として発展していったと言われている。

ここには娯楽、快楽、ショッピング、バッティングセンター、何でも揃っている。合

法マイコセンター、大型デパート、カラオケボックス、スシバー等だ。とはいえアンダーの上層部まではキョートの警察であるケビーシ・ガードの目も比較的届いており、キョートの裏の顔をみようという物好きな観光客もそこまでは訪れる。問題はその下だ。

４層より下、アンダー中層まで下がると空気は変わる。華やかな無秩序さは影を潜め、活気の無い、しかし不穏な気配が漂い始める。息のつまるような重みのある大気、安っぽく青く塗られたイミテーション天井。謎のアルコールを提供する居酒屋、非合法マイコサービス、オハギ屋台などが堂々と店を出し始め、路地裏ではフリークスがナイフを光らせる。

更にその下、１０階以下の下層となると完全に闇の世界である。最低限の衣食住のために、劣悪な環境で安い賃金で働く労働者たち。そこで生まれ、一生太陽を知らず死んでゆく者たち。人間の姿をしながらも人間扱いされない者たちが住む世界だ。イチカが買っていたのは、その中層以下についてのアンダーグラウンドな書籍だったのである。

「私が聞きたい……イチカ＝サンめ、こんな本を買うまで堕ちていたとは」憮然とホウキが言う。先程のイチカの反応にホウキはこれを緊急事態と定めて自室にセシリア等４人を呼んだのだ。それにシャルが返す。「センセイが居なくなって一週間以上になるし、色々とメンタルが不安定になっているのかも……」

シャルはそう言ってイチカを弁護しつつ、内心で別の想いを呟く。（イチカ＝サン。そこまで追い込まれていたのなら、ボクが、あ、相手を……）僅かに頬に朱が混じる。しかしそれをシャルは口に出さない。少女がそういった事を口にするのは奥ゆかしくないからだ。「それなら、わたくしがお相手して差し上げましたのに！」「……」

セシリアは奔放であり、そのバストは豊満である。「な、何を言っているのよセシリア＝サン!?」顔を真っ赤にしてリンが言う。「リン＝サン！　貴女こそ状況を分かっていまして？　このままイチカ＝サンを放置しておけば、何処の馬の骨とも知らぬマイコにイチカ＝サンの純潔を奪われてしまいますのよ!?」

「イチカ＝サンの不安定な気持ちは分からなくはない」水を差したのはラウラである。「ま、まあ、私もヨメに浮気をされると、困るが……」言い淀むあたり、彼女も思う所は

あるようだ。「ともかく！」ホウキがチャブを叩き、一同の視線を集めさせる。「今後、イチカ＝サンを徹底監視する。報告を密に取ろう」

その意見に他の女子たちも異議は無かった。「イチカ＝サンがアンダーガイオンに下るようならそれを追跡、それでもしマイコセンターにでも行こうものなら……」そう言いつつホウキは手元のカタナを手に取った。先ほどの竹刀とは異なる真剣だ。「私が斬る！」「……切り殺してどうする」ラウラが冷静な指摘を投げた。

……三日後！

ホームルームを終え、部活や帰宅に向かう生徒たち。その間を気配を殺してイチカが早足に歩く。「何処へ行く、イチカ＝サン？」それを鋭く見つけたホウキが声をかけた。「何処って、トイレだよ。ホームルーム中我慢してたから」そう答えつつ、気を急くように足踏みするイチカ。「む……そ、そうか」そう言われて止める事は出来ない。ホウキは頷いた。

女性が大半のＩＳ学園では男子トイレの数は少なく、距離もある。「悪い。何か話が

あるなら後で聞くから」イチカはそう言って手を小さくチョップするように振ると、再び駆けていった。一応その後を視線で追うホウキ。確かにイチカはトイレに入っていった。「……気にし過ぎか」本を読んだだけで気晴らしが出来たのかもしれない。ホウキはそう思った。

「すまない……ホウキ＝サン」イチカはそう呟くと、男子トイレの窓に足をかけ、校舎を抜けだした。懐にはアンダーガイオンのガイド本。「よし……」チフユが家に入れてくれていたクレジットのお陰で、手持ちはそれなりにある。出来ればＩＳ学園の制服でなく私服に着替えたかったが、それでは他の生徒に気付かれるだろう。

アンダーへ降下するためのリフトエレベータは学園外にある。イチカは周囲を確認し、人気が無い事を確かめて小走りにその場を離れた。「……こちらラウラ・ボーデヴィッヒ。状況Ａ発生、繰り返す。状況Ａ発生」……そのトイレの窓を見下ろす校舎の屋上で狙撃の姿勢のまま構える一人の少女あり！　ラウラだ！

麻酔弾を装填したスナイパーライフルを構えつつ、ワイヤレス通話で他の少女達に通信を送る。「どうする、撃つか？」返ってくるホウキの声には怒りが滲む。「イチカ＝サ

ン……！　いや、撃つのはまだだ。ポイントを決めて合流して追おう。ラウラ＝サンはそのまま尾行を続けてくれ」「了解。リフトエレベータまで先行する」通話ＯＦＦ。

そのような連絡が飛んでいる事には全く気付かず、イチカはガイオンの優雅な街並みを進む。ＩＳを使えばヒトツトビで到着できるだろうが、ＩＳの公の場での使用は基本的に禁止とされている（気軽に携帯・起動ができてしまうため、守る者は実際少ない）。何よりこのアンダーに向かうのは他者には秘密だ。目立つ事はしたくなかった。

アッパーガイオンの低い建物が並ぶ街並みは実際美しく、この下に様々な欲望や悪徳が渦巻いているとは思えないほどだ。そして……ニンジャも。かつてこのキョートという都市はザイバツ・シャドーギルドという巨大ニンジャ組織によって支配されていた。政府も、警察も、司法も、商業も、そして人の意識までもである。

半神的存在であるニンジャは一人でもヤクザ数十人分に匹敵する恐ろしい戦力である。それを数百人抱え、キョート城を根城に恐るべき陰謀を企てていたのがザイバツであった。しかし……その組織はもう存在しない。一人の復讐者と、一人の探偵。一人のハッカー、そして僅か数人の協力者と不確定要素の存在により、ザイバツは滅びた。

本来ならば英雄と讃えられるべき彼らのイクサを知る者は当人たち以外居ない。賞賛も、勲章も、栄誉も、ドネートも無いイクサであった。しかし、成さねばならないイクサであった。彼らは満身創痍になりながらも勝利し、互いの肩を叩き合い、そして其々の日常に、あるいは次のイクサに散っていった。

「アー……」アンダーガイオン８層タコ区画１９番地、シャッターの降りた店の多い通りに古びた一軒の探偵事務所あり。年季を感じさせる鉄の看板にはブルズアイ・ランタンじみた道具を持って飛翔するカラスの絵が描かれている。その下には「ガンドー探偵事務所」の文字。中に入ると、やはり古びたリキシの色紙や「探偵」と書かれたショドーが出迎える。

「アー……畜生」ジャンク基盤や使用済みアンプルやらが散乱する机に足を置き、半ば仰向けの姿勢で座りながら氷嚢で頬の引っ掻き傷を冷やす巨漢あり。その髪は完全に白く、ほうれい線が頬に深く刻まれている。年の程は４０～５０くらいだろうか。しかしながら中年から壮年になりつつある男の身体は、日々のカラテトレーニングにより引き締まったままだ。

「どうするかだよなァ……」その男、ガンドー探偵事務所所長――と言っても、現在はアシスタントも不在で唯一の所員でもあるのだが――タカギ・ガンドーはそう呟きつつ氷嚢を机に置いた。酷い仕事だった。ペットのミニバイオ水牛の捜索という仕事自体は珍しいものではなかった。依頼人から提示された報酬も良かった。

だがそれを失くした所が問題だった。アンダー上層の会員制秘密クラブ。当然ヤクザのシノギも絡んでいる場所だ。色々な表向きの交渉が不本意な結果で終わった結果、ガンドーはそこのバウンサーと大立ち回りを演じる事になってしまったのだ。では頬の傷はそれなのか？　否、これは依頼者から受けた傷である。

手乗りサイズのミニバイオ水牛は、猫を相手にしてすら命の危機に陥る。案の定、探し当てたそのペットは別の客の持ち込んでいたジャコウネコの餌となっていた。当然ガンドーは血の付いた首輪を渡し顛末を説明したが、その際に激昂した依頼人から引っかかれたのだ。報酬も大幅に減額されてしまった。それが今の彼の口から出る愚痴の原因だ。

おかげで元々苦しい状況であった事務所の今月の収支は見事に炎上。このままでは翌月にはガンドーは干物となってしまうだろう。「ニンジャが干物か。笑えねえな」乾いた笑みを浮かべ、彼は机から残り少ないＺＢＲアンプルと使い捨て小型注射器を取り出し、慣れた手つきでアンプルを割り、注射器に注ぐとそれを肘の裏側に突きさし、押し込んだ。

「アー……遥かにいい」ＺＢＲが全身に回り、意識が明確になり、気分が晴れやかになってゆく。実際のところ、このＺＢＲの購入が事務所の運営に多大な影響をもたらしているのだが、それを改善するつもりは彼にはない。彼にとってＺＢＲは仕事をする上で食事や睡眠以上に必要なものだからだ。痛みも治まり、ガンドーは今朝の新聞を手に取った。

顔をしかめる。『血液型ウラナイ・金運悪し。急な来客に注意。女難の可能性あり』……ハハ」他愛ないウラナイにガンドーは笑うと椅子から立ち、部屋の隅の木人相手にカラテトレーニングを始めた。もう一度彼の名を言おう。タカギ・ガンドー、ガンドー探偵事務所の所長にして、ザイバツ相手に「復讐者」と共に死闘を繰り広げた探偵にして、ニンジャ。

……ガンドー探偵事務所半壊まで、あと三時間。

＃4

「第４層開発計画推進要求」「アッパーと見紛うサービス」「スシ」「カラテが身を護る」「良心的価格」「アルヨ仕事」「キョート・アポカリプスの真相説明会」等々の胡乱なチラシが灰色の壁に貼られ、アンダーガイオン３層の緩い風に微かに揺れる。しかしエレベータ搭乗口に並ぶ者たちはそんなチラシを一瞥もしない。

オリムラ・イチカはエレベータのゲートで警備を行うケビーシ・ガードにＩＤカードを差し出した。第３層までは比較的フリーで来れたが、ここからはより警備が厳しくなるようだ。下からパス無しで侵入する者を防ぐ役割もあるのだろう。ガードはイチカのＩＤを確認すると、気遣うように言った。「君、ここからは実際アブナイだよ?」

イチカはＩＳ学園の白い制服を着たままである。アッパーの学生が制服のまま向かうには、確かにここから下は安全とは言えないだろう。「ダイジョブです。人と待ち合わせていて、ガードも居ますから」イチカはそう答えた。これは半分嘘であり、半分は本当だ。まだ人と会うアテは無いが、ガードは彼の右手に存在している。

「分かった。カラダニキヲツケテネ」「アリガトウゴザイマス」カードを受け取り、イチカはエレベータに乗った。降りる人は少なく、乗る人は多い。中層に住居を持つ労働者が多いのだろう。大半が男性で、古びた対汚染ブルゾンやダスターコートを羽織っている。イチカは改めて自分が降りようとしている場所の空気の違いを感じた。

　そのイチカの背中を数十m後方から伺う少女の一団があった。ホウキ達5人である。

「ちょっと、乗り遅れますわよ!?」「ここから先のリフトに同席すれば流石に気付かれる。次の便で行くべきだ」焦るセシリアをラウラが止めた。ＩＳ学園の制服を着たガイジンを含む5人の少女グループ、それも全員がカワイイでは確かに目立つのは避けられない。

「だが、せめてイチカ＝サンが何層で降りるかだけでも把握できないと見失うぞ?」

「……なら、私が先行しよう。尾行は訓練済だ。イチカ＝サンが何処で降りたかを確認したら、合流ポイントを決めて落ち合おう」「え?　ラ、ラウラ＝サン?」焦るホウキに、ラウラは頷くと返事を待たずエレベーターに向かい始めた。

何時の間に着替えたのか、彼女だけはＩＳ学園の制服でなく着古したジーンズにチェック柄のシャツ、少し汚れたフード付きのパーカーというアンダーでも珍しくない服装である。確かにその姿で単独なら、イチカにも気付かれないだろう。ＢＥＥＰ、ＢＥＥＰ、アラート音が鳴り、ラウラは駆け込み乗車めいた所作でエレベータに乗り込んだ。

「ラウラ＝サン、全く！」ホウキは勝手に先行したラウラの背を見つつ言った。ＩＳ学園の生徒は各国からＩＳ適性を見込まれ送り込まれたカチグミである。それ故か彼女らは個性的でマイペースな者が多い。特にラウラは他の少女と異なり、ローティーンの頃からドイツで軍の特殊部隊に所属し、今ではその隊長も兼任しているとホウキは聞いていた。

「ま、まあ、間違った事は言ってないんだし、私達はラウラ＝サンの報告を待って次の便で降りようよ」シャルが怒るホウキを宥めるように言う。「ねえ君たち、アッパーの学生だよね？」その時、彼女ら４人に声をかけてきた者たちがいた。「え？」リンがそちらを振り向くと、数人の若い男たちのグループがこちらに軽薄に笑いかけている。

彼らは一様に日焼けし、鍛えた筋肉を誇示するように半袖から太い腕をむき出しにし、襟を開けて胸筋をアピールしている。おそらくは大学でカラテやケマリをしているジョックの大学生グループであろう。彼らのリーダーと思しき、金髪チョンマゲの大学生が声をかけた。「アンダー初めて？　俺ら案内するよ？」

ナムサン！　彼らはこうやってアンダーガイオンに慣れていない女子に目に付け、親切な振りをしつつ秘密部屋に連れ込み前後行為に持ち込んでいるのだ！　「えっと……どうしようかな」シャルは考えるような素振りで胸元のクロスを弄った。一見恥じらいのように見える行動だが、それは実際拳銃の撃鉄に指を置く行為に等しい。

ＩＳは、シノノノ・タバネの生み出したハイ・テックにより通常は粒子化され各自のアクセサリに収納されている。それらを彼女たちは1秒以内で完全展開できる。いわば今も彼女らは完全武装の状態なのだ。「……リン＝サン、次の便は何分後だ？」ホウキは彼らを文字通り塵紙を見るような視線で眺めると、背後のリンに尋ねた。

「えっと……１０分後ね」ＩＲＣ端末に時刻表を表示し、リンが答えた。「十分だ」ホウキはそう言うと、金髪チョンマゲに向かって言った。「いいだろう。案内してもらおう

じゃないか」（ああ、これはホウキ＝サンがあの人たちをＩＳで叩きのめして、ボク達がそれに巻き込まれる展開だね）（そうね）（ですわね）シャル・リン・セシリアは無言で視線を交わした。

ワン・アイズ・クロウ・ウィズ・ワンス・サマー　　＃４

――アンダー第８層・イカ地区・メヒジキ＝ストリート

「ア、アイエエエ!?」ストリートギャング〝ブラッディ・オキナ〟リーダーのタケゴトは眼前の光景に悲鳴を上げ、腰を抜かした。彼らブラッディ・オキナは血も涙も無いギャングである。上層から迷い込んできた旅行者やアッパー住民などに目を付け、包囲し、金を巻き上げ、更に身分が高そうな者であれば拉致して身代金を要求する。

今回彼らが目をつけたのも、そんな上層から迷い込んできた学生の筈であった。明らかにアンダー慣れしていない挙動、上質な白い制服。アッパーから度胸試しに来たイディオットな少年と見定め、タケゴト達十数人は手に手に金属バット、バール、サスマタ、ジュッテ、ブラックジャック等を威圧的に構えてその少年を包囲した。

今思えば、包囲した時の反応からおかしかった。「良かった。思ったより早く会えた」そんな事を言い、まるで平然としている。「ナンオラー!?」「スッゾコラー!」威圧的なヤクザスラングと共に包囲が狭まってゆく。「ザッケンナコラー!」舐められたと思ったタケゴトは叫びと共に金属バットを振り下ろした。腕の骨の一本程度は折るつもりだった。

しかし、確かに少年の腕に叩き込まれるかに見えた金属バットは突如出現した装甲によって澄んだ金属音を鳴らすに留まった。「何だ、こりゃあ……?」「時間が無いんだ。えっと、アンタがリーダー?」「アッコラー!?」不穏な気配を感じた部下が背後からジュッテで殴る！　金属音！　やはり突如現れた装甲で少年は無傷！

「チェラッコラー!?」それを見た別の部下が右からバールで殴る！　金属音！　やはり少年無傷！　「スッゾスッゾコラー！」別の部下が左からサスマタで殴る！　金属音！　やはり少年無傷！　既に少年の身体は、白いヨロイめいた装甲と不可視の障壁で包まれていた。「ア……」タケゴトが悲鳴を上げかけた瞬間、その顔に鉄の拳が叩き込まれた。

実際手加減はされていたのだろう。タケゴトは鼻血を噴き出しながら仰向けに倒された。周囲の部下が色めき立つ。「アンタ達、見た目通りの悪人みたいだし遠慮は要らないよな!?」その少年はそう言うと、周囲のヨタモノ達に拳を向けた。タケゴトの意識があったのはそこまでで、おそらくは数十秒の気絶の後、目を覚ました時には全員が昏倒していた。

「アイエエエ!」もはやギャングとしての威勢も失い、這いずりながら逃げようとするタケゴト。その襟首を誰かが掴んだ。「ちょ、ちょっと待った!」見ればその少年が装甲に包まれた手で自分を軽く持ち上げている。「アイエエエ……」「この第8層がアンダーで一番誘拐や失踪が多いって聞いたんだ。アンタ、何か知らないか?」

少年……否、既に名を伏せていても賢明な読者の方々はお気づきだろう。イチカは焦りを顔に浮かべつつ、恐怖に凍ったままのタケゴトに尋ねた。何とも少年らしい向こう見ずな行動であった。「蛇の隠れ道は実際蛇が知っている」とはミヤモト・マサシの格言である。イチカは情報誌で知ったアンダーのそういった危険地帯で、チフユの失踪の手がかりを掴もうと考えたのだ。

「ザ、ザッケンナコラー！」「イヤーッ！」「グワーッ！」最後のギャングとしての矜持からタケゴトは拒絶しようとしたが、その右頬に鉄の拳が叩き込まれる。イチカも必死なのだ！　「ザッケ」「イヤーッ！」「グワーッ！」まだ粘るタケゴトの左頬に鉄の拳！　イチカも必死なのだ！　「……何か知らないか？」「ア、アイエエエ……」

ここでイチカにとって幸運だった事が二つ、不運だった事が二つある。まず幸運のひとつは、彼が最初に出会ったのがニンジャでなかった事。ザイバツという巨大組織こそ消滅したが、今もなお根無し草めいたニンジャは存在するのだ。もう一つはこのタケゴトが、アンダーでも失踪等については腕っこきの探偵を知っていた事。

逆に不幸であった事は、このタケゴトがその探偵にかつて誘拐絡みの一件で殺されかけ、深い恨みがあった事、そしてもう一つは、この状況においてなおタケゴトがギャングとしての狡猾さを持ち合わせていた事である。「あ、ああ……知って、知ってます。この8層には人買いの元締めがいて、失踪とかなら……」

「それだ！　誰だ、何処にいる!?」食いつくイチカ。タケゴトは表面上は従順を装いつつ

言葉を続けた。「と、隣のタコ地区で、身分を隠して暮らしています。案内しますから、離して……アイエッ！」突如離され、タケゴトは尻餅をついた。「分かった。変な事は考えるなよ？」「アイエエ……も、勿論です」頭を下げつつ、タゲコトはイチカの前を歩きだした。

幾つかの小路を抜け、寂れた通りへ出る。人工的な茜色の光が町を照らしている。地下都市であるガイオンには当然ながら太陽は無い。遥か高い天蓋に取り付けられた照明が疑似的な昼夜を作り出しているのだ。「あ、あそこです」タケゴトの指差す先に、一軒の事務所めいた建物があった。看板には「ガンドー探偵事務所」

「探偵事務所……？」「あれが表向きの顔です。探偵として失踪者や行方不明者の情報を集めながら、裏で人間のトレードをしているんです」怪訝な顔をするイチカにタケゴトは説明した。明らかな嘘！　しかしサツバツたるアンダーガイオンの流儀を知らぬイチカはその嘘を見抜けない。「……分かった。案内ドーモ」そう言ってイチカは踏み出す。

「も、もう帰っていいですか？」おどおどと尋ねるタケゴトに、イチカは思い出したよう

に言った。「ああ、オタッシャデー」「オ、オタッシャデー」そう言い残し、イチカは事務所に入ってゆく。そろそろと距離を離し、自身の安全が確保された事を確認してからタケゴトは舌打ちすると小走りに駆けだした。「ペッ、イディオットが！」

　タカギ・ガンドーは実際強い探偵だ。元々油断ならぬ強さだったが、暫く事務所を空け、帰ってきて営業再開してからは更にカラテに磨きがかかりブラッディ・オキナのヨタモノ程度では手が付けられなくなった。あの少年と潰し合ってくれれば良し。どっちが酷い目に合ってもタケゴトの留飲は下がる。

「バケモノ同士、勝手にやってやがれ！」「人のヨメをバケモノ扱いとは心外だな」「エ？」「イヤーッ！」「グワーッ！」毒づくタケゴトの真横で突然の声。彼がそちらを振り向くと、猫の手のように第二関節だけ曲げられた拳が鼻と唇の間に叩き込まれた。カラテの禁じ手のひとつ、一本拳人中打ちだ！

「イヤーッ！」「グワーッ!?」銀髪をフードに隠した少女、ラウラはのけ反ったタケゴトの身体に今度は回し蹴りを食らわせ、そのまま路地に叩き込んだ。倒れ込み、咄嗟に逃げようとするタケゴトの背中に爪先を食い込ませる。「……私は尋問をするのもされる

のも苦手でな、教官をよく怒らせた」「グワーッ！」

「これからお前がイチカ＝サンに何を吹き込んだのかインタビューするが、うっかりオタッシャしてしまったら……まあ、許せ」「ザ、ザッケ」「イヤーッ！」「アバーッ！」……ナムアミダブツ！

……その６０秒前！

『……スゴイ！　新人のナギノウミ、ドヒョー上からベテランのクロハガネを挑発している！　しかし電流爆破ドヒョーの時限装置は既に働いているぞ！　残り一分で勝負を着けるつもりなのか!?』欺瞞的なオスモウ番組をかけ流しつつ、タカギ・ガンドーは眼前のスシ・パックの残り二個のスシ、タマゴとマグロのどちらから食べるかを吟味していた。

結局胃袋の中に入るものではあるのだが、その時の気分や口に残る後味等を考えると、なかなか重要な問題であった。何しろ現在のガンドー探偵事務所の預金残高では、このスシ・パックを食べきると次の収入が入るまでより安価なガリ・スシやオカラ・ス

シに頼らざるを得なくなるからだ。『……答えた！　クロハガネ、ドヒョーに上がった！』

「マグ……いや、タマゴか」ガンドーは一度マグロに手を伸ばしかけ、少し考えてタマゴを手に取り、咀嚼した。マグロの後味を少しでもニューロンに残しておこうという発想だ。『アーッ！　時間が、時間が！　ドヒョー爆発まで残り１０秒、９、８……』その時、ドアがノックされずに開いた。少年が入ってくる。

　ガンドー探偵事務所は壁の無い１フロアに低い衝立を置き、仕切りにしている。彼のデスクからでも来客は確認できたが、ガンドーはその少年をまるで火星人が入って来たような顔で見て、そして眉をひそめた。（ブッダ！　こりゃ面倒な客臭えぞ）

　その少年の身なりは上質で、顔色も良かった。アンダーの人間は自然の太陽光を浴びる事が極端に少ないため、顔色の悪い者が多い。明らかにアッパーの、それも相応の扱いをされている人間だ。それに加えてガンドーが不穏な気配を感じ取ったのは、その少年の顔つきだった。

そこには焦りがあった。そして決意があった。自分が今から行おうとしている事が法に照らせれば無法で、しかしそれを選ばざるを得ないという決断的な視線があった。そしてガンドーは彼とは初対面だ。心当たりも無い。これらの情報を下に、ガンドーの探偵としての錆びかけた洞察力とニンジャ観察力がはじき出した結論は……

（……何かの重要な目的があってアンダーに来て、俺に関する良からぬ嘘を吹き込まれたって所か？）ブルズアイ！　ガンドーは少年に先んじて立ち上がり、アイサツを行った。「エート、はじめまして……だよな？　ドーモ、タカギ＝ガンドーです」「……ドーモ、ガンドー＝サン。はじめまして。オリムラ＝イチカです」少年もアイサツを返す。

アイサツは絶対の礼儀だ。例えそれが、不穏な空気の中だろうと。「で、イチカ＝サン、場所を間違えてねえか？　ボーイスカウト事務所なら二本向こうの通りだぜ？」陽気な口調でガンドーはイチカに言った。しかしイチカの表情は険しいままだ。「……ガンドー＝サン、アンタがここの所長でいいんだよな？」

「……ああ、そうだ」ガンドーは机に残ったままのマグロ・スシに一瞬目をやり、再びイチカに視線を向けた。とはいえガンドーに面倒と思う気持ちはあったが、危機感は無

かった。相手は体格もガンドーに劣る学生である。多少のカラテをやっている程度であれば難なくいなせるだけの実力差はあると踏んでいた。

「悪いけど……アンタに聞きたい事がある！」――少年の腕から発せられた光が装甲に代わり、振り上げられた拳がデスクを破壊するまでは。

ＫＲＡＡＡＳＨ！　スティール製のデスクが大きくひしゃげ、上に載っていたジャンク基盤や枯れたサボテンやワータヌキ置物が跳ね上がる！　「!?」少年は怪訝な顔をした。一瞬前までそこに立っていた筈のガンドーが居ない。「オイオイオイ！」見よ、２ｍ近い巨体ながら、ガンドーはその一瞬で７フィートの距離を置いた場所に立っているではないか！

「エート、お前はアレか？　カートゥーンとかに出てくる『超未来から過去を変えるために来た暗殺者』って奴か？」ガンドーはそう言うと、何とか鉄の拳が叩き込まれる寸前に拾い上げる事に成功したマグロ・スシを口に放り込んだ。「……悪いが、人違いだぜ」

＃5

「……!?」オリムラ・イチカは驚きを顔に浮かべつつ眼前の白髪の巨漢を見た。生身の相手に全力のＩＳの攻撃を叩き込めば実際死ぬ。確かに加減した攻撃ではあった。しかしそれでも生身の人間の反応速度では対応困難な速度と、無力化させるには十分な威力を込めた一撃の筈であった。

だが、相手の速度はイチカの予測を上回っていた。ビャクシキ装着による奇襲の一撃を、装甲展開から衝撃までの一秒にも満たない時間で反応し、回避したのだ。「……何者だ、アンタ?」驚きを浮かべたままその巨漢、ガンドーに尋ねる。「そりゃこっちの台詞だぜ、ギャラクシーファイター」マグロ＝スシを口にいれつつ、探偵はそう答えた。

ワン・アイズ・クロウ・ウィズ・ワンス・サマー　＃5

（さて……こいつは何だ?）タカギ・ガンドーはイチカの白い装甲を見据えつつ思考した。ニューロンの奥から眼前の少年が装備するパワード・スーツの正体に関する情報を

検索する。やがて、その中から掘り出される幾つかの新聞記事。

　オーバーテクノロジーめいた女性しか扱えない超兵器。表向きはスポーツ競技として、アッパーにそれの操縦者を育成する国際機関が存在するのはガンドーも知っていた。その中で唯一の男性操縦者の存在はキョート新聞のスポーツ欄を一時期賑わせていた。まあ、それもカタストロフ後はうやむやになってしまったが。

（とすると厄介だなァ、こりゃあ）オムラ・インダストリの欠陥ＡＩ搭載ロボ程度ならガンドーも相手をした事があるが、それとは性能は格段に違う筈だ。何より（おそらくはこちらの事を勘違いしたままの）少年を相手に全力で戦うというのはガンドーとしても気は引けた。（だったら……）「イヤーッ！」ガンドーは床を蹴り、真横に飛んだ。

　その先には古びたコート掛け。スラックスと白いシャツ、サスペンダー姿だったガンドーは咄嗟にそのコートを手に取ると、即座にそれを羽織った。同時にガンドーの首回りに黒いマフラーが生成され、メンポめいてその顔を覆う！　ガンドーは両脇に手をやり、そこから黒光りする巨大拳銃・４９マグナムを取り出した。（手品めいたやり方だが……！）

おお、見よ！　破損したデスクの影から数羽のカラスが飛び立ち、弾の込められていない４９マグナムに飛び込み弾丸と化したではないか！　これこそガンドーに憑依するニンジャ、カラス・ニンジャのジツである！　「ニ、ニンジャ!?」それを見てイチカは明らかな動揺を見せた。「ニンジャナンデ!?」

古代よりニンジャは超常的な能力で世界を裏から支配してきた。全てのモータルには、遺伝子レベルでニンジャへの恐怖が記憶されている。それは普段は顔も出さないが、ニンジャと直面した時に呼び起され、モータルに抑えがたい恐怖とパニックを引き起こすのだ。これがＮＲＳ（ニンジャ・リアリティ・ショック）である。

如何に強力なＩＳだろうと装着者はモータルである。ガンドーは正面からでなく、こちらをニンジャと認識させる事でＮＲＳを引き起こし無力化させようと考えたのだ。「イ、イヤーッ！」しかし、イチカは表情こそ動揺を露わにしながらも的確な動きで近くの椅子を足場に宙を舞った。行動に支障なし！

これはＩＳに搭載されている操縦者保護機能による。宇宙空間での運用をそもそも

の前提としていたＩＳには、着用者を守る機能が幾重にも搭載されている。例えば急加速や急制動などでブラックアウト・ホワイトアウトを着用者が起こしかけた場合、ＩＳのナノマシンが血流のコントロールを行い健康状態を維持するのだ。

イチカは確かにガンドーのメンポとジツを見てＮＲＳを起こした。しかしナノマシンが急激な心拍数の上昇等を感知し、自動的にイチカの身体をヘイキンテキな状態に戻したのだ。「イヤーッ！」イチカは空中で三回転すると、ガンドーの背中に蹴りを叩き込んだ。「グワーッ！」ＳＭＡＡＡＳＨ！　そのまま壁沿いに置かれたロッカーに頭から衝突！

「ヤ、ヤバイ!?」イチカはやり過ぎたかと焦った。しかしガンドーは軽く頭を振っただけで立ち上がった。「ああ畜生、やっぱりそう簡単にはいかねえか！」ＩＳの聴力強化機能がそう呟くガンドーの声を拾う。改めて向き合う両者。ラウンド２だ！

『これは、何と！　見えます、爆破されたドヒョー・リングの上に人影が！』ノイズ混じりのオスモウ中継が二人の間に空気を読まずに流れる。「……」無言でイチカはガンドーを見た。どこかサイバネ化しているのだろうか。この探偵は常人に比べて遥かに

タフネスだ。何とか抵抗されない程度に無力化しようと考えていたが、加減が難しい。

「オイ、少年」一方、ガンドーはイチカが規格外の装備を持ちながらも、その精神は普通の少年のそれと変わらない事に気付き始めていた。ならばここは駆け引きから隙を作りだし、場の流れを掴むべし。「アンタの格好いいそれ、拳銃くらいなら平気か？」「エ？」ガンドーの奇妙な質問にイチカは一瞬戸惑い、そして律儀に答えた。「……ああ」

「聞いた事あるぜ。それ、ＩＳって奴だよな？　新聞じゃ『ミサイルだって跳ね返し空も飛ぶ。実際スゴイ』とか書かれていたな」視線を合わせたまま言葉を交わす。「詳しいな、アンタ」「探偵だからな」ガンドーの口調はあくまで軽い。基本的に陽気な男なのだ。「……探偵で、人買いだろ？」そう答えるイチカの視線は険しい。

「……」ガンドーは答えなかった。ここで彼の言葉を否定しても信じてはもらえないだろう。まずは落ち着いて話が出来る状況まで持っていかなければ、この手の血の気の多い少年は止まらない。過去の様々な事件の経験からガンドーはそれを知る。「……泣くんじゃねえぞ！」

ガンドーは床を蹴り、イチカに肉薄した。ハヤイ！　カラス・ニンジャ憑依時にガンドーが得た、常人の三倍の脚力による加速だ！　「イヤーッ！」ＢＲＡＭ！　ＢＲＡＭ！　ガンドーの４９式マグナムが黒い弾丸を吐き出す！　「イヤーッ！」しかしイチカはその銃撃を予測、一手早く動き弾丸を回避！　ワータヌキ置物粉砕！　陶製フクスケ粉砕！

だが「イヤーッ！」「グワーッ!?」イチカは予想外の方向から強烈な衝撃を受け、その身体を大きく後退させた。シールド防御をして無視できぬ衝撃だ！　ＢＲＡＭ！　再度の銃撃！　その銃撃はイチカの方に向いていない。しかしその４９式マグナムの爆発的反動によるガンドーの肘が立て続けに叩き込まれる！　「イヤーッ！」「グワーッ！」

ゴウランガ！　これこそ暗黒武道ピストルカラテ！　常人ならば発砲の衝撃だけで骨折する程の４９式マグナムの爆発力をカラテの速度と威力に転化した、危険極まりないカラテである！　それにガンドーのニンジャ筋力とニンジャ瞬発力が加わる事により三倍、つまり百倍のカラテとなる。その威力は爆弾にも引けを取らぬ！

イチカは背中に鉄の翼を展開し、後方に下がる！（やれるか!?）ガンドーは吹き飛んだイチカに肉迫しようと脚に力を込めた。幸いＩＳの防御力は触れ込み通りのようだ。両手の４９マグナムの残段数は右が４発、左が５発。一対一のイクサであれば十分な数。

（こいつは!?）一方、イチカはここに来て相手の戦力を見誤っていた事を悟った。先ほどのニンポ（訳注・ニンジャが使うジツ（術）と異なる、魔法めいた概念）といい、この探偵が本物のニンジャであると信じざるを得ないようだ。イチカは焦りから左手を構えた。その手の先からエネルギーの爪が生まれる。ビャクシキの兵器の一つ、「セツラ」である。

アブナイ！　この爪の一撃を受ければ如何な頑丈なガンドーの身体だろうと無事では済まぬ！　しかしイチカのシールドも今の連撃で大きく消耗している。もしガンドーの残りの弾を全て使ったカラテを食らえば無事には済まぬ。緊急用の絶対防御の発動のタイミング次第では、イチカの肉体にもダメージは及ぶであろう！

「イヤーッ！」「イヤーッ！」距離を詰める両者！　「イヤーッ！」瞬間、そこに赤い影が

割って入った！「シバラク、シバラク！」制止の声。ＣＲＡＡＡＳＨ！　衝撃音と共にデスクが吹き飛ぶ！「……何だァ？」ガンドーは呟いた。イチカと同様の、赤いＩＳを装着した少女が両手のカタナでイチカのクローとガンドーの４９式マグナムを食い止めている。

「シバラク！　このイクサ、待った！」赤いＩＳの少女、ホウキは必死に声を上げ制止しようとしていた。「ホ、ホウキ＝サン!?」驚くイチカ。「イチカ＝サン！　バカ！　スゴイ、バカ！」容赦ない罵声をホウキは浴びせた。「……その探偵は人身売買のバイヤーではないぞ、イチカ＝サン」ドアからの声。そこに立つ４人の少女と、大きなボロ雑巾めいた何か。

　銀髪の少女、ラウラはそう言うと手にしたボロ雑巾を床に投げた。「こいつ!?」イチカは驚いた。ボロ雑巾に見えたそれは、徹底的に叩きのめされた人間だ。そしてその人間にイチカは見覚えがあった。「……どうやら、見えてきたな」ガンドーはため息を一つつくと緊張を解き、４９マグナムを回転させるとホルスターに戻した。「さて、話をしようじゃねえか」

……２０分後！

無茶苦茶になった事務所内を何とか話が出来る程度まで片づけ、何とか破損を免れたチャブを挟んでイチカ達とガンドーは向き合っていた。「スミマセン！」「アー、まあ、何だ、騙されてたんだから、気にする事はねえよ」ドゲザするイチカにガンドーは軽く答えたが、スクラップ化したデスクを見て軽い頭痛を覚える。これでガンドー事務所は素寒貧だ。

「それよりも、事情を聞かせて貰えないか？」とりあえずガンドーは事務所の修繕の事を一旦ニューロンの奥にしまい込み、イチカ達の話を聞く事に思考を切り替えた。ＩＳというのは装着に適性があるという。彼ら、彼女らは適性者という時点でアッパーでもＶＩＰクラスの筈だ。そんな存在がこうしてアンダー中層まで来る必要がある事情、興味はあった。

「えっと、でも、それは……」「一応は探偵の端くれではある。話は聞くぜ？」申し訳なさそうに頭を上げたイチカにガンドーは重ねるように言った。そう言いつつ近くのコンパクト冷蔵庫からＺＢＲカクテルの缶を取り出してプルタブを押し開け、一息に呑

む。「まあ」セシリアが眉をひそめた。大凡上品とは言えない行為だ。

「……アー、これは痛み止めだ」普段通りに振る舞いすぎたか。ガンドーはセシリアの反応に咳払いで返すと、改めてイチカに向き合った。「で、誰を探しているんだ？」そう言われ、イチカは背筋を伸ばし答えた。「……姉を、探しています」そしてイチカは語り始めた。チフユの最後の授業、謎の二人、それからの音信不通とアッパーの探偵社での出来事。

「三日で？」ガンドーはそれまで黙って聞いていたが、探偵社の下りでイチカに初めて質問した。「ハイ。依頼をしてから三日で『ウチでは無理』と断られました」「……」顎を擦りつつガンドーは考えた。余りに早く、そして不自然であった。その表情に苦みが増す。

　アッパーの探偵社は資金面、人材面でも優秀だが、何よりアンダーと比べて勝っているのはメガコーポ等との強いコネクションだ。情報そのものを商品として、簡単な依頼であればその繋がりを通じて容易に解決させてしまう。ミツケル探偵社ほどの大手であれば、ＩＳ学園の教師ひとりの足取りを掴むのは可能だった筈だ。

では何故イチカに断りを入れたのか……答えはシンプルで、かつ厄介だ。おそらくは、大手探偵社の繋がりがあるメガコーポでも太刀打ちできない程の暗黒メガコーポが、そして、その規模の相手であれば……確実にニンジャが絡んでいる。だからこそ調査を打ち切り、イチカに断りを入れざるを得なかった。そう考えるのが自然だ。

（さて……）ガンドーは更に考える。ここでイチカを普通に帰しただけでは、彼は諦めず姉の捜索を続けるだろう。それで踏み込み過ぎれば、邪悪な企業ニンジャと遭遇して殺される可能性は実際高い。ガンドーのようにモータル時の人間性を維持したままニンジャ化する者は少ない。多くはニンジャ邪悪性に呑まれ、躊躇なく他者を殺傷できる存在になる。

そしてその規模の相手では、如何にガンドーがニンジャとはいえ単独で挑むには荷が重い案件と言えた。国内有数クラスの大企業は何処も裏の仕事のためにニンジャを雇用している。それは一人二人ではない。バックアップ無しでそれに挑むのは、激流に命綱無しで飛び込むのと同義と言えた。

「……いいか、イチカ＝サン」暫しの沈黙の後、ガンドーはイチカ達に言った。「おそらくそのチフユ＝サンの件だが、ニンジャが絡んでいる」「はあ？　ニンジャ？」リンが呆れたように言った。モータルにとってニンジャはあくまで宇宙人めいた架空の存在だ。その反応を当然のものと受け止めつつ、ガンドーは大真面目に返した。「ああ、ニンジャだ」

「え、ええっと……」「シャル＝サン、リン＝サン、この人の言っている事は本当だ」反応に困るシャル。イチカは彼女らにフォローするように言った。その視線を再びガンドーに合わせる。「……ガンドー＝サン、アンタもニンジャなんだよな？」頷くガンドー。「そうだ。だから分かる。危険だ」「ニンジャに殺される。そう言いたいのか？」ラウラが言った。

「……」ガンドーは意外そうにラウラを見た。「何だ？」「いや、随分あっさり信じてくれると思ってな」「ドイツ軍でもニンジャの存在は認識しているし、軍属のニンジャも居たからな」あっさりとラウラは答えた。「も、勿論わたくしも存じていましたわ！」謎の対抗心からかセシリアも言う。

「……イチカ＝サンを信じるとしよう」ホウキはそれだけ言うと、ガンドーを静かに見た。居心地の悪さを感じつつ、ガンドーは言葉を続けた。「もう一度言うぜ。イチカ＝サン、アンタの姉のチフユ＝サンの失踪だが、ニンジャが絡んでいる可能性が高い。これ以上追いかけるのは危険だ」

イチカの表情に険しさが混じる。「……諦めろ、と言うんですか？」「諦めるんじゃない。アンタの姉さんを信用しろと言ってるんだ」我ながら詭弁だ。そう思いつつガンドーは言った。「自分の意思で彼女が姿を消したなら、戻ってくる可能性だってある。それをもう暫く待ってみるんだ」「……」納得していない。まあそうだろう。ガンドーは嘆息した。

「ガンドー＝サン。貴方も探偵との事ですが、ご依頼は出来ませんの？」セシリアが身体を前に出して尋ねた。予想通りの展開。ガンドーは演出的な苦笑を浮かべた。「アー、まあ、俺としても引き受けたい所ではあるんだが……」わざとらしくスクラップ化したデスクに視線を向ける。「アッパーで調査をするには、予算がなァ」

「弁償を含めて依頼料はちゃんと出しますわ。お幾らですの？」真剣な表情で問いかけ

るセシリア。ガンドーは少し考え、予想される必要経費よりややふっかけた額を言う事にした。「まあ……最低でも初動で５００万は必要だな」「ごっ……」言葉を失うイチカ。ガンドーは内心で安堵の息をついた。彼らには悪いが、これで諦めてくれれば危険は遠ざかる。

「……」セリシアはその額を聞き、無言で携帯ＩＲＣを取り出した。「ガンドー＝サン、こちらの事務所の口座番号をお教えいただけます？」「あ？　ああ……」多少戸惑いつつもガンドーは素直に答えた。「……」無言で携帯を操作するセシリア。キャバアーン！　突如、奇跡的に破損を免れていた事務所のＵＮＩＸがジングルを鳴らした。

「あ？」嫌な予感を覚えつつ、ガンドーはモニターを見た。事務所の預金口座の金額のケタが二つ増えている。「……」言葉を失うガンドーに、セシリアは堂々と言った。「イチカ＝サンのご依頼、受けていただけますわね？」セシリア・オルコット。イギリス名門貴族にして、両親の遺した遺産を守り抜いた少女。彼女はその莫大な予算の使う時を知る。

「……」ガンドーは暫し天を仰ぎ何とかここから言い逃れる術を探り……やがて、諦め

たように頭を下げた。「……ヨロコンデー」

＃6

薄暗い街並み。だらしなく垂れた電線に停まったバイオスズメが人工的な空に飛び立つ。安っぽいスカイブルーで塗られたアンダーガイオン８層の天井には幾つもの大型タングステン・ボンボリが吊り下げられ、その光量の強弱によって疑似的な昼夜を作り出している。ボンボリの光は次第に強さを増していた。疑似的な朝が来るのだ。

その光は８層の街並みに均等に降り注ぎ、タコ地区のガンドー探偵事務所の窓にも差し込んだ。「ウゥ……」錆びついたパイプベッド上、タカギ・ガンドーは顔にかかる疑似的な日差しに獣めいた呻きを上げ、寝返りを打とうとした。

「……ん?」強い違和感。何かが身体の上に乗っている。ガンドーは再度の眠りに落ちようとする意識を無理矢理起こし、目を開けた。銀髪の小柄な少女が身体を丸め、ガンドーの身体を敷布団にするようにして寝息を立てている。その身体には眼帯以外は何も着けていない。

「……」無言でガンドーは今の状況を把握しようとした。彼の目覚めに反応したのだろう。銀髪の少女が目を開け、「オハヨ、ガンドー＝サン」起き抜けだというのに明確な意識で口を開いた。ガンドーは大きく口を開け、「……オハヨ、ラウラ＝サン」とりあえずアイサツを返した。朝のアイサツは実際大事だ。

アイサツを終え、ガンドーはラウラに尋ねた。「なあラウラ＝サン、三つ聞いていいか？」「何だ？」ガンドーの上から降り、ベッドに腰かけるラウラ。そのバストは平坦である。「エート、アンタ確か昨夜、ウチで寝床を貸そうとしたら『構わない。適当な所で泊まる』って言ってたよな？」「ああ、そうだ。流石探偵、記憶は良いようだな」

何故か堂々とラウラは答えた。「安宿を見つけたはいいが、そこの主が何を勘違いしたのか私に金を出して前後を要求してきてな。殴り倒して出て来た」「……」おそらくは家出か、何かしらの後ろめたい事情を持つ少女と思われたのだろう。ガンドーは額に手を当て、二つ目の質問を口にした。「で、何で服を着てないんだ？」「寝る時に着る服が無い」

やはり堂々とラウラは答えた。「……まあ、それじゃ仕方ねえな」本人がそう言う以

上、そうなのだろう。周囲がどう思うかはさておき。「そこまでは分かったが……何で俺の上で寝ていたんだ？」「アンダーガイオンの夜は意外と肌寒い。とりあえずここに戻ってきて、一番体温が低下しない場所で寝ようと思っただけだ」

やはり堂々とラウラは答えた。ガンドーはどう注意したものか言葉を探し……やがて、諦めたように言った。「アー……何だ、肌寒いなら何か着て寝たらどうだ？」「ふむ、確かにそうだな。考えておこう」それだけ答えるとラウラは全裸のまま洗面台に向かった。ガンドーは朝から草々に頭痛を覚え、額を軽く叩いた。

ワン・アイズ・クロウ・ウィズ・ワンス・サマー　＃6

何故このようになったのか？　それは前日の夕方、ガンドーがセシリアの入金により依頼を受けざるを得なくなった時点から説明せねばならないだろう。「さて、依頼を受けるとなると必要な事がひとつある」受けた以上は真剣にやる。探偵としての顔にガンドーは変わり、真面目にイチカに言った。「できればアンタ達の中から一人、バックアップが欲しい」

「バックアップ……ですか？」イチカが尋ねる。「この件だが、本格的に調べようと思ったらアッパーとアンダー、それとＩＳ学園とも行き来が必要になる。それのフォローと連絡役だ」ＩＳ自体がブラックボックス性の高い兵器である都合上、ＩＳ学園のセキュリティレベルは物理・ネットワーク共に実際高い。バックドアを用意する内部協力者は必須だった。

「それともう一つ、俺に万一があった時に音信不通って訳にもいかねえしな」苦笑混じりでガンドーは言ったが、これも実際本心からであった。実際危険な仕事の気配がしていた。強い気配が。「……分かりました。だったら俺が」「私がやろう」考えつつイチカが名乗り出ようとした時、ラウラが有無を言わせぬ勢いで言った。

「ラ、ラウラ＝サン？」驚くイチカ。ラウラはイチカに言った。「イチカ＝サンがこれ以上動くのは良策ではない。センセイの弟である以上、一度マークされれば逆にチフユ＝サンの弱みになるかもしれない」「あ……」その言葉でイチカの記憶が引き出される。第二回ＩＳ世界大会「モンテ・グロッソ」、誘拐された自分、消えた二連覇。

「……」言葉を無くすイチカ。更にラウラは言った。「それに私であれば自分の部隊へ

の一時帰還などで数日の休みを取る事はできる。口裏を合わせておけば学校側からも怪しまれはしない」「そ、それはそうかもしれないが！」口を挟んだのはホウキである。「と、歳が離れているとはいえ、一つ屋根の下で男と寝食を共にするというのは……！」

「さっきのヨタモノの話では、このガンドー＝サンは年季もあるプロの探偵だ。依頼人を傷物にする事は無い。そうだな？」「あ？　ああ……勿論だ。そこは信用してもらっていいぜ」いきなり話を振られ、ガンドーは戸惑いつつ答えた。自分の探偵事務所というホームで話をしているはずが、どうもこの場では彼女らに主導権を奪われがちだ。

「他はどうだ？」「……」異論は出ない。ラウラは改めてガンドーに向き合うとオジキした。「ガンドー＝サン、ヨロシクオネガイシマス」「あー、ラウラ＝サン、ヨロシクオネガイシマス」オジギを返すガンドー。「とりあえず今晩はＩＲＣネットで集められる情報をまとめて、本格的な調査は明日から始める。動き有ればすぐに連絡するぜ」

「ヨロシク、オネガイシマス」イチカは深々と頭を下げた。まだこの探偵と出会ってから数時間と経っていない。しかしイチカは彼とのイクサとその後の会話から、直感的に信用すると決めた。先程騙されたようにこれは少年特有の短絡的な思い込みかもしれぬ。

だがそれでも、少なくとも彼はアッパーの名ばかりの探偵よりは遥かに信用できると思った。

「では、お願いしますわね。追加の必要経費が発生した場合は遠慮なく申しつけ下さいな」セシリアが言った。「……出来るだけ抑えるさ」ガンドーが気まずそうに答える。やはりハイティーン相手に大金をこれ以上要求するのは気が引けるのだろう。「頼むわよ探偵さん！　オリムラ＝センセイは私達全員にとって大事な人なんだから！」リンが強く念を押す。

「ガンドー＝サン、ヨロシクオネガイシマス」最後にシャルが丁寧に礼をする。他と違ってそこまで当たりが強くないその態度に、ガンドーはやや和らいで答えた。「ああ、任せといてくれ」「ただ……」シャルは笑顔のまま、声のトーンを落とした。「もし調査中にラウラ＝サンに何かあれば、全力の絨毯爆撃をお見せしますね」シャルは笑顔のままだ。

「……ああ、任せといてくれ」成程、このグループの中で一番怒らせてはいけないのは彼女か。ガンドーはそれを知り、僅かに背を震わせた。時刻は既に夕方に近い。学園へ戻るイチカ達を送り、半壊した事務所内にはガンドーとラウラのみが残った。「さてと、そ

れでアンタの寝床だが……」「構わない、適当な所に泊まる」

そう言って、今後の簡単な打ち合わせを行った後にラウラは事務所を出て、ガンドーはＵＮＩＸの修復作業を行って幾つかの調査を行い、就寝した。そして今朝の一件に繋がる。「……昔は助手がいたのか？」大き目の洗面台の鏡の前で歯ブラシを動かしつつラウラが尋ねた。「何でそう思うんだ？」その横で同じく歯ブラシを動かすガンドー。

「歯ブラシにコップが二つ、デスクだって複数あった。探偵でなくても分かる」「ああ、昔居たぜ。優秀なのがな」「今は居ないのか？」「アー、まあ、居ないって訳でも無いんだが……」そう言うと、ガンドーはどう答えたものか考えているのか額の黒い太陽めいた弾痕をトントンと叩いた。ラウラはコップの水を含み、口を漱ぐと何か察したように頷いた。

「なるほど……そういえば日本の独身男性は自身の孤独を埋めるために、自分の脳内に『ノウナイ・ヨメ』なるものを飼うと聞いた事がある。それか」「……それで構わねえよ」面倒になったのだろう。ガンドーは顔をしかめつつ口を漱いだ。「それよりラウラ＝サン、こっちからも聞いていいか？」「何だ？」「何で名乗り出たんだ？」

ボーイフレンドのイチカへのアピールか、チフユを救いたいと思う気持ちの強さからか。ガンドーからすれば軽い気持ちからの質問だったが、返ってきた返答は遥かにシリアスだった。「イチカ＝サン達に殺人はさせられないからな」ガンドーはコップを戻す手を止め、ラウラの方を向いた。「何だと？」

「最初のイチカ＝サンへの説得も、学生に対しての高額な依頼料も請求も、これ以上関わらせないためだったのだろう？　彼女の資産を甘く見たな」「……」「それだけ危険な調査ならば当然身の危険もあるだろう。その時、イチカ＝サン達では相手を殺す所までは出来ない。だが、軍で『殺し方』を学び、実践してきた私なら出来る」

「……大したもんだ」ガンドーは素直に感心した。このどこか天然めいた少女が、自分が思うより遥かに重い覚悟で挑んでいた事に気付いたのだ。「ラウラ＝サン、ブッダのこの話を知ってるか？」だが、それ故に危うさをガンドーは感じた。彼女は余りにシリアスになり過ぎている。「どんな話だ？」

「ある日ブッダは使徒を集め、ワニで満たされた蓮池の上に一本の縄を渡すと、そこを渡

るように使徒に命じた。最初のひとりは全くブレずに縄を渡ろうとして、あえなく池に落ちた。二人目は棒を持ち、左右にブレながら歩く事で見事これを渡り切った「ブッダの使徒は無謀な訓練を平然と行えるほど訓練されていた、という話か？」

「……まあ、そういう解釈もあるけどよ。俺の師匠はこう言っていた」真顔で答えるラウラに、ガンドーは軽い頭痛を覚えつつ話を続けた。「シリアスになり過ぎて右にブレ過ぎても、リラックスし過ぎて左にブレ過ぎても、小さなブレを恐れてもいけない。そうしなければ縄を渡れずに落ちるってな」「……なるほど、それが探偵の流儀か」

ガンドーの言葉の意味の何割かでも伝わったのか、ラウラは口元に僅かな笑みを浮かべた。「そうだ、それでいい。陽気に、真面目にだ。とりあえず朝飯を食ったら調査開始だ」「分かった、協力しよう」頷くラウラに、ガンドーは今更ながら言った。「……いい加減、着たらどうだ？」彼女は未だに全裸のままだった。

――――それからの数日は、ガンドーにとっても、またイチカ達にとっても慌ただしい時間だった。

ＩＳ学園・ＩＲＣルーム内、シャルは緊張した表情でキーボードに指を走らせていた。その一方で、廊下に顔を出しつつリンが周囲を警戒する「リン＝サン、誰か来てる？」「まだ大丈夫！」ピポッ、画面から小さいＰＩＮＧ音が鳴った。ガンドーが複数の外部サーバーを経由して、ラウラとシャルのＩＳ学園生アカウントを利用して学内のネットに潜入したのだ。

これは言わば、ＩＳ学園の分厚い校門を二人の学生証を利用して突破したような状態である。とはいえこれだけでは達成率は５０％、ここから更に職員室に忍び込み、会議ログを盗み出すのがこの行為の目的だ。当然ながらこれは学生の権限を大幅に逸脱した行為であり、発覚すれば良くて厳重注意、悪ければ停学も有りうる。

「接続良好。数分の接続状況維持頼む」ガンドーからのメッセージ。シャルは偽装として開けた別ウィンドウで友人と他愛ないメッセージの交換を行う。「……ヤバイ、センセイが来てる！」廊下のリンからの声。シャルは額に汗を浮かべガンドーに警告を送った。「リン＝サン、足止めお願い！」「わ、分かった！」

リンは慌てて廊下に出ると、こちらに向かう途中だった教師に何気ない素振りで声を

かけた。「あ、あの、センセイ！　質問があるんだけど……」「あら、どうしたの？　リン＝サン？」「エ、エート、その……」モニターではカエルとウサギのＣＧが荷物の受け渡しを行っている。ダウンロード率、６０％……７０％……８０％……９０％……

「来た！」『ダウンロード完了』の表示と共にシャルは接続を切断し、画面を通常状態に戻した。「あ、ゴメンナサイ！　リン＝サン、もう解決したから！」素早く廊下に出て、たどたどしく話すリンに助け舟を入れる。「そ、そう？　良かった！　センセイ、解決したみたいなのでこれで！」「え？　リン＝サン？」呆気に取られる教師を残し、二人は逃げ出した。

ＩＳ学園・シミューレータールーム。「むう……流石はオリムラ・センセイ。全く動きに無駄がない」「感心している場合じゃないぞ、ホウキ＝サン？」ホウキとイチカが確認しているのは、チフユの最後の授業の映像記録だ。戦闘の参考にするために、記録映像の閲覧は生徒には許可されている。無論、一般市民にとってはこれも極秘事項だ。

イチカ達の目的は、アリーナを出る時にチフユに同行していた二人の映像である。「ウーン……」録画はチャイムが鳴る所までしかされていない。最後の画像が残ってい

れば話が早かったのだが、仕方なく客席がフレームインしている画像を1カットずつ確認してゆく。「イチカ＝サン、これはどうだ？」

ホウキに呼ばれ、イチカはその画像を見た。授業終わり間近、イチカとチフユが組み合っている部分だ。客席の一部に黒い影。それを拡大する。黒髪のスーツの女と、サイバーサングラスに白衣の女性。「これだ！」「こいつらが、オリムラ・センセイを……？」それは一見ただの二人の女性。しかし、映像からも伝わる邪悪さをイチカ達は確かに感じ取った。

アッパー市街地の高級カフェ。サマードレス姿のセシリアは優雅にチャブ上のティーカップを手に取り、紅茶を一口飲んだ。「あの……」灰色のスーツを着た青い瞳の老人が彼女に声をかけた。「スミマセン、私はキョートは初めてで……ガイジン向けの観光地で、何か良い所はありませんか？」

セシリアは落ち着いた口調で答えた。「そうですわね。でしたらリキシャーに乗って五重塔巡りなどは如何でしょう？　バイリンガルなドライバーなら丁寧に案内して下さいますわよ」「アリガトウゴザイマス。お礼と言っては何ですが、これを……」丁寧に

頭を下げ、老人はマンジュウ菓子を机に置くと歩き去った。

「……」セシリアは無言でマンジュウを手に取ると、二つに割った。中にマイクロフィルム。ＩＲＣ端末を手に取り、静かに言う。「こちらオルコット。どうやら本当だったみたいですわね」情報は揃いつつあった。

――某所、某時刻。

赤い照明が点灯する室内。無数のケーブルが床に這い、室内の各所に用途不明な機材が無造作に転がっている。その中央に玉座のように置かれた、リクライニングチェアめいた銀色の椅子。そこに座り、８つのホログラムモニターと８つのホログラムキーボードを同時展開して高速タイピングを続ける女性。

ＢＥＥＰ、ＢＥＥＰ、ＢＥＥＰ、「訪問者ドスエ」アラート音と共にマイコ音声が響く。「んー?」タイピングを行う指を止めぬまま、その女性は視線だけを動かして壁沿いのモニターを見た。「お?」その指が止まる。「おーおーおー!」蒸気排出音めいた響きと共に隔壁が開く。そこに立つ三人の女性。「おわー!　ちーちゃん!　ちーちゃん!　生

ちーちゃんだよ！」

「……『生』はやめろ」オリムラ・チフユはテンション高くはしゃぐ彼女を前に、あくまで落ち着いた口調で言った。「嬉しいなー！　初めてじゃない？　ちーちゃんからここに来てくれたのって！」しかし相手はそれを聞くつもりも無いようだ。余程嬉しいのか、ぴょんぴょんと室内を跳ねまわっている。

歳の程は２０代前半だろうか。ブルーのワンピースにエプロン、頭にはウサギ耳めいたカチューシャ。到底この場所のアトモスフィアとは噛み合わない姿である。少なくとも、街中でこの姿で歩いていて彼女がＩＳの最初にして唯一の開発者、シノノノ・タバネであると分かる者は居ないだろう。

「いやいや待っててね。今すぐオチャとオカキ用意するから」チフユの後ろの二人を少し見ただけでスルーし、タバネは戸棚へ向かおうとして……その足を止めた。彼女としては極めて珍しい事にその背後の二人を二度見し、顎に手をあてる。「ほー、ほほー、ニンジャ、ニンジャだね。珍しいねえ、ニンジャなんて。ニンポ使える？　ブンシンできる？」

スーツの女性の方の眉が不快そうに歪む。それを抑えるように白衣の女性がサイバーサングラスに指を置いた。液晶画面に『オチツケ』と表示される。「……タバネ＝サン、頼みがある」チフユは僅かに表情に苦渋を浮かべると、静かに口を開いた。

#7

涼やかな水音に合わせ、優雅なシシオドシの音が響く。アッパーの料亭「ブブヅケ」、高級官僚も利用する料亭で紹介者無しでは利用できず、ランチメニューでマケグミ・サラリマンの月収が吹き飛ぶ。「アー」その料亭の一室、アケビの間においてタカギ・ガンドーは落ち着かなげに言った。「確かに高セキュリティの場所で話そうとは言ったけどよ」

「わたくしの知る中で、此処が一番セキュリティ面で安全ですわ。防音面でも対ハッキングについても。イチカ＝サン達も遠慮なく召し上がってくださいね」「……アッハイ」イチカは部屋の空気に圧倒されつつ、希少なオーガニック・エビを使ったテンプラにハシを入れた。

「それで、捜査の進捗はどうなってますか？」チャを飲みつつシャルが尋ねた。「ああ、まだ最後の確認が終わってないが、大凡の形は見えてきたぜ」ガンドーはそう答え、高級チャブの上に幾つかの写真と書類を広げた。その中の一部はシャルやリンが手助けしたＩＳ学園の教員以上が閲覧可能な情報や、セシリアが入手した情報も含まれている。

「……そもそもの問題は、キョート・アポカリプス以後のＩＳ学園の懐具合だ」書類の一つを示す。細かな数字が並んでいるが、ある所から急激にその数字が減少している。キョート・アポカリプス。キョートに未曽有の人的・物的被害を与えた人体発火・キョート城消失・大規模暴動等の災害の一斉勃発――という事に表向きはなっている。

ガンドーは言葉を続ける。「国際的機関のＩＳ学園がキョートに存在してた理由は、その中立性と安全性が信頼されていたからだ」ハイ・テックを疎んじるザイバツ・シャドーギルドがＩＳを軽視していたってのもあるがな。ガンドーは内心で呟く。「その信頼性が、あの大災害で崩壊したと？」ホウキの質問にガンドーは頷いた。

「それで、こうなっている訳ですわね」セシリアがチャブ内臓のキーボードに触れる。各人の座席の前にホログラム投影される右肩下がりのグラフ。各国からのＩＳ学園への

支援金の推移を示す表だ。「ちょ、ちょっと！　こんなに減ってたの!?」リンが驚いて腰を浮かせる。

　最新鋭のテックを扱うＩＳ学園は、その維持費だけでも莫大な予算が必要となる。公立校扱いとはいえ、当然それはキョートのみで賄えるものではない。代表生を送り込む各国からの支援金があったからこそ、世界で数百体しか存在しないＩＳの数十体もの所有と管理が可能だったのだ。

「で、でも、それだとＩＳの技術交換やテストの場が無くなるんじゃ?」「いつまた災害が起こるか分からない場所に予算をつぎ込むなら、代表生を戻らせて自国で研究した方がマシ。まあ、そう考える奴は居るだろうさ」シャルの言葉にガンドーは答えた。先天的なものであるＩＳの高適合者は替えの利かない国の財産である。その価値は計り知れない。

「……実際、私にもドイツから帰国の打診が来ている」それまで沈黙を保っていたラウラが言った。「そうだったのか?」イチカが尋ねた。「まあ、こちらにヨメが居るから離れられないと説明しているがな」「……」イチカの頬に汗が一筋流れる。いずれ婚約指輪

でもドイツから送られてくるのではという想像を打ち消す。

「アー、話を戻すぜ」咳払いしつつガンドーが言った。冷めかけたシシトウ・テンプラを摘まんで口に放り込む。「で、そこでＩＳ学園に出資しようって話を向けて来たメガコーポがある。それがこいつらだ」写真のひとつ、チフユの最後の授業の際に観客席にいた二人の女性の拡大画像。サイバーサングラス着用の女性の白衣の胸に「ヨロシサン」のバッジ。

「ヨロシサン製薬？　何で薬品メーカーが？」イチカは怪訝な顔で尋ねた。栄養ドリンクからバイオペット開発、サイバネティック義肢まで手掛ける国内最大手の医療メーカーだ。「薬品メーカーってのはあくまでこの会社の表の顔だ。裏社会ではこいつらはクローンヤクザの製造販売や、バイオニンジャの開発を行ってる」

「はあ？　クローン？」リンが呆れたように言った。一般社会ではクローンが既に実用化されている事は伏せられているのだ。「ああ、クローンだ」大真面目な顔でガンドーは返し、言葉を続ける。「レジェンド・ヤクザの遺伝子を元にしたクローンを企業やヤクザに売り込んでる。お前たちも、気付かずにどこかで会ってると思うぜ」

「……」イチカは無言で息を呑んだ。自分たちが触れようとしている事柄が、今までの人生で踏み込む事の無かった闇の世界の片鱗に繋がっている事を改めて知ったのだ。「アブナイに近づけば怪我をする」とはミヤモト・マサシの格言である。だが、それでもイチカは真実に、消えたチフユに近づきたかった。

「大体は見えてきましたが……まだ話が繋がりませんわね」セシリアがチャを飲みつつ尋ねる。「ＩＳ学園の予算が枯渇しかけて、そこにヨロシサンが支援を持ちかけた。結果としてオリムラ・センセイが連れて行かれた。では何のために？　社会人チームの秘密コーチでも頼むつもりなんですの？」「そんな甘いモンじゃねえ」

ガンドーは首を振る。「これはアンタらの方が詳しいだろうが……ＩＳってのはユニット自体もそうだが、高いレベルの適合者ってのも極めて希少な存在だ。訓練でどうにかなるモンじゃなく、地道に適性検査で探すしかねえ。砂漠から砂金を探すようにな」一同を見渡し、低い声でガンドーは言った。「これを、大量生産できるようになったら？」

シャルが思わず口に手を当てる。「……オリムラ・センセイのクローンを!?」理解力の早い少女達だ。ガンドーは頷いた。「そうだ。モンテ・グロッソ初代優勝者にして二連覇確実だった国内最強のＩＳ適合者。素体としては申し分ねえ」「そんな事をすれば、各国のパワーバランスは崩壊するぞ！」ホウキがチャブに拳を叩き付ける。

「それならまだいい」事前にガンドーと共に調査していただけあり、ラウラは冷静なままだ。「それを『商品』として使われた場合、各国はわざわざ民間から適合者を探す必要も無くなる。更に結果として、提供元のヨロシサン無しでＩＳ界隈は立ち行かなくなるだろう」つまり、一企業が世界のパワーバランスを左右する事になる。

「で、でも、それってクローンが上手く作れたら、センセイは帰ってこれるって事よね？」焦りながらも僅かの希望を頼りに尋ねるリンに、ガンドーはやはり首を横に振った。「トップシークレットのオリジナルだ。クローンの調整とかで必要と考えると殺されるとまでは行かないだろうが……それでも、一生ヨロシサンの施設内で飼い殺しだろう」

「そんな……！」ブッダ！　何たる邪悪にして無慈悲な企てか！「なら、どうすればいい？」イチカの表情にも深い焦燥が刻まれている。「落ち着け」内心はどうかは不明だが、

ガンドーは落ち着いた様子でチャを飲んだ。「こういう時こそ順序だてて考えないとダメだ。冷静に、落ち着いて、花札タワーを組み立てる時のように丁寧にな」

ガンドーは手元のキーボードを操作し、各人の手前に新たなホログラム画像を表示させた。何かの建物のようだ。「これは?」「アンダー第七層にある廃工場だ」更にキーボードを操作。加えて幾つかの映像が表示される。「過去にケミカル食品を製造していて、とっくに廃業している……筈なんだが、ここ数日、そこに大量の物資が輸送されている。送電量も急増」

更に操作。業務用リフトエレベーターから降りるチフユと二人の女性の姿。ガンドーが警備会社をハッキングして盗み出した防犯カメラの映像だ。「そして、この第七層でチフユ＝サンの足取りも途絶えてる。別の何かの目的で使われている工場かもしれんが、当たってみる価値はある」

「大丈夫なんですか?」不安そうに尋ねるシャル。ガンドーは陽気に笑った。「アクション映画よろしくチフユ＝サンをそこで救出しようって訳じゃねえ。まずはそれの下準備ってところだ。ヤバいと思えば即撤退、安心しといてくれ」「では、次の集まりはそれ

からですわね」話の終わりを感じたのだろう。セシリアが言うと、チャブの呼び出しボタンを押した。

「さて、それではお食事を済ませてしまいましょうか。ドサンコ産アズキを使ったアンコ・パフェにオーガニックマンダリンですわ。イチカ＝サン、よーく味わってくださいませ」自慢げに言うセシリア。おそらく彼女は自分でなくイチカのためにこの場を予約したのだろう。ガンドーは軽い頭痛を覚えつつ言った。「アー、次はランクをもう一つ落としてくれ」

……無菌状態の廊下を歩く、髪を結わえた黒スーツの女性。その顔の半分はメンポに覆われている。「オツカレサヨロシサンマデス」時折すれ違う白衣の男性は全て同じ顔、同じサングラス、同じ髪型の研究員カスタム仕様のクローンヤクザ。彼らはルーティンワークめいた作業を任せるにはこの上なく効率的な存在だ。給料も福利厚生も要らない。

やがて彼女はその突き当りの銀色のドアにたどり着いた。指紋認証を行うと空気圧縮音と共にドアがスライドし、中の冷えた空気が女性を出迎える。中でモニターに流れ

る数字の推移を眺めていた、白衣にサイバーサングラス姿の女性研究者が振り向きアイサツを行った。「ドーモ、デコイ＝サン」「……ドーモ、ウズムシ＝サン」

彼女の名はウズムシ・ツタデ。本計画の主任であり、デコイと呼ばれた黒スーツの女性ニンジャの上司にあたる。「タバネ＝サンの様子はどう?」「チフユ＝サンの言う通りです。こちらが危害を与えられないと分かってるのか、まともにアイサツすら返さず作業を続けています」「傷ひとつ付けないでくれたまえよ。私の為にも、お前の為にも」

飄々と言うウズムシに、デコイは眉をひそめながらも頭を下げた。「……ヨロコンデー」ニンジャとはいえ、ヨロシサン謹製のバイオニンジャではないデコイの組織内での立場は決して高いものではない。外注警備会社のいち警備員であった彼女は警備中に爆弾テロに会い瀕死の重傷を負い、そこでニンジャソウルに憑依され、結果ヨロシサンに雇用された。

「ニンジャになればカチグミになれる」そう思っていた彼女の考えは余りに甘かったと言えるだろう。ヨロシサンには既にバイオ強化された生物兵器めいたニンジャが幾人も上位に存在しており、彼女に与えられたのはデコイ(餌)という自虐的なニンジャネー

ムと、敵の狙いを自分に引き付けさせる文字通りの餌役としての任務だった。

（だが、それもここまでだ）デコイはそう思い、本社から遥か離れたキョートの地の寂れたアンダーガイオンまで送り込まれた自分の運命を呪うと共に、この先に待ち受ける栄光を信じた。この計画が成功すれば、自分は本社のバイオニンジャすら上回る力を手にする事になる。いけ好かない研究者ではあるが、その意味においてウズムシに感謝もしていた。

ニンジャになってから判明した、本来ならば何の役にも立たずに終わる筈だったデコイの適性、高度のＩＳ適合者。これに目をつけたのがウズムシだった。彼女もまたヨロシサン内での地位向上を目指しており、その元々の計画に付け加える形でデコイを警備兼要員として迎え入れたのだ。「おっと」ウズムシが何かに気付き、手元のコンソールを操作する。

「気分はどうかね、チフユ＝サン」部屋の中央には巨大なシリンダーめいた水槽が置かれ、透明な緑色の液体が満たされている。その中で酸素マスクを着けながら浮かぶ、全裸の黒髪の女性。その胸は豊満である。『問題ない、快適だ』スピーカーから聞こえるオ

リムラ・チフユの声。彼女は覚醒している。

「そうだろうとも。水質、水温、全て最適に調整してある。少し反応を測るため微弱な通電はあるが、まあセントーに入ってると思ってくれたまえ」『ああ、そうさせて貰おう』サイバーサングラスを挟み、ウズムシとチフユは眼を合わせた。強化ガラス越しとはいえ、チフユの超人的な身体能力であればこの水槽を破壊する事は可能かもしれない。

だが彼女はそれを、仮にこの場にデコイが居なかったとしても実行しない事をウズムシは確信していた。ソンケイに値する愛校精神だ。いや、あるいはそれは家族愛か。「完了後、手間だがまた我々と共にタバネ＝サンの所に同行してくれ。彼女は我々ではまともに話を聞いてくれなくてね」『ヨロコンデー』チフユは即答した。感情を映さない瞳で。

……その偽装された研究所を見下ろすビルに二つの影があった。「あれか」「ああ、再稼働し始めたのはつい数日前からだが、建築系の業者が入った形跡はねえ。建物の構造自体は変わってねえ筈だ」ラウラとガンドーはそう言葉を交わし、研究所を眺めた。「さてと……」双眼鏡を取り出し、ガンドーは周囲の警備状況を探る。

ニンジャ憑依現象は対象者に大幅な身体能力の強化をもたらすが、それは元のニンジャソウルの影響によって強弱や偏りがある。ガンドーの中のカラス・ニンジャは三倍の脚力と影のカラス化というジツを持つが、カラスだけにか視力はさほど強化されていない。「待て」ラウラがそれを押しとどめると、左目に付けた眼帯を外した。金色の瞳が顕わになる。

「……正面に二人、裏門に二人。全てクローンヤクザＹ―１４型。装備は……ＮＮ４４７アサルトライフルに、防刃ジャケット。一撃で仕留めれば問題なさそうだ」淡々とラウラは言い、眼帯を戻した。「……」「どうした？」呆気にとられつつガンドーは言った。「いや、何だ、片目じゃなかったんだな」「秘密という訳ではないが、見せびらかすものでもないからな」

『ヴォーダン・オージェ』肉眼へのナノマシン移植手術による、視力の爆発的な強化とセンサー化による後天的な肉体的特徴である。知識として知る訳ではないが、普段隠しているという事はあまり触れられたくはないのだろう。ガンドーはそれを察し、ラウラにそれ以上尋ねず体を起こした。「よし、行くか。行動は迅速に、そして丁寧にだ」

「ああ。行くとしよう」そう言うとラウラはガンドーの大きな背中に回り込むと軽く飛び跳ね、その太い首に手を回し背中に乗った。いわゆる「オンブ」の体勢である。「……」「……」数秒、沈黙が場に流れる。「……なあ、ラウラ＝サン。こりゃどういうつもりだ？」「ニンジャならここから飛び降りても平気だろう。私は飛び降りたら死ぬからな」

なるほど。軍人らしい、効率を重視した絵面を気にしない発想だ。「アンタはここで……」「相手の内部戦力が不明な以上、外部で退路を確保する要員が必要だろう。クローンヤクザであれば私も問題なく、気兼ねなく殺す事もできる」「……」残念ながらラウラの言葉は正解である。単独での潜入と脱出は実際危険が大きい。だが、それだけだろうか。

おそらく彼女も強く思っているのだ。チフユを救いたいと。力になりたいと。「……分かった、しっかり摑まっておけよ」少女を首にしがみつかせながら宙を舞う探偵か。まるでひと昔前のカートゥーンだ。ガンドーはそう苦笑すると、マフラーをメンポめいて首筋に巻き付けた。「ンッ」マフラーの感触がくすぐったかったか、ラウラが声を漏ら

す。

「……さあ、行くぜ！」そう言うとガンドーはラウラと共に、ビルの屋上から身を躍らせた。

＃8

（これまでのあらすじ）ＩＳ学園教師の失踪。それは暗黒メガコーポであるヨロシサン製薬の恐るべき陰謀と結びついていた。オリムラ・イチカと５人の少女はアンダーの探偵、タカギ・ガンドーと協力してその調査にあたる。結果、浮かび上がってきた真相はブッダも恐れぬ戦慄すべきものだった。

伝説的ＩＳ操縦者にしてイチカの姉、オリムラ・チフユ。彼女を素体にしたクローン計画。これが実際に運用されるようになれば、ＩＳ界隈、ひいては世界のパワーバランスをヨロシサンは掌握する事になる。この調査と推理の裏付けを取るため銀髪の軍人少女、ラウラとガンドーはヨロシサン秘密工場への潜入を図る。カラダニキヲツケテネ！

ワン・アイズ・クロウ・ウィズ・ワンス・サマー　＃8

「イヤーッ！」ガンドーはラウラを首に巻き付けたまま、ビルの屋上を蹴り眼下のセントーのカワラ屋根の上に降り立った。「イヤーッ！」更にカワラ屋根を蹴り、工場により近いアパートの影に着地する。「……お客さん、到着だぜ」首筋の手をポンを叩く。するりとラウラはガンドーの背から滑るように降り、周囲を伺う。

彼らは今、廃工場の裏門の近くにいた。同じ装備、同じ顔、同じ髪型の二体のクローンヤクザが非人間的な画一的な動きで周囲を警戒している。「で、どうする？」「俺が先行する。気を引き付けている内にもう一体を」「分かった」そう言いつつラウラは懐からナイフを取り出す。一見軽装備だが、瞬時にＩＳを展開できる彼女には銃火器は無意味だ。

「イヤーッ！」ガンドーは再度三回側転からジャンプを行い、工場の壁に貼りつくように着地した。粗悪コンクリートの壁を拳で叩く。「音がしました」左右のクローンヤクザの右側の一体がそれに気付いた。「何でしょう」「私が見てきます」アサルトライフルを構え、右のクローンヤクザは持ち場を離れた。左のクローンヤクザがそれを見送る。

次の瞬間、左ヤクザの背後に音もなくラウラが降り立った。「スッゾ……」その気配に

気づき振り向こうとした瞬間、その口に小さな手が押し当てられ、首筋に冷たい光が走る。「(アバッ)」喉をナイフで切り裂かれ、悲鳴を上げる事も許されず左ヤクザは絶命した。「アッコラー?」違和感に気付いた右ヤクザが振り返ろうとする。

「アバッ」だがその瞬間に右ヤクザの首に丸太めいた腕が巻き付き、首の骨が一瞬で砕かれる。一瞬で接近したガンドーがヤクザを絞め殺したのだ。「……大した腕だ」「アンタもな」淡々と言うラウラにガンドーが答えた。彼女の容赦の無い一撃にガンドーは内心で舌を巻いた。伊達にドイツ軍特殊部隊長を名乗ってはいないということか。

懐を探るがＩＤカードの類は無い、どうやら警備用のクローンヤクザは工場外の警備詰め所で過ごしていたようだ。「フゥーム」ガンドーは顎に手をやり考えた。少し面倒になるかもしれない。とりあえず二体のクローンヤクザの死体を手短なコンテナに放り込み、周囲を警戒しつつ二人は敷地内に走り込んだ。

工場の裏口に到着し、ドアに触れる。ノブの横にカードリーダーらしきスリットがある。やはりＩＤカード式か。強引に破れば流石に気付かれるのは間違いないし、ハッキングには時間が必要となる。「ああ畜生、仕方ねえか」ガンドーは首筋に埋め込まれたＩ

ＲＣ端子にケーブルを差し、電子錠の端子と接続しようとする。

「待て、ガンドー＝サン」それをラウラは制止し、視線を上に向けた。「ア？」ガンドーもそれに合わせて見上げてみると、そこには錆びついた通風孔があった。ガタガタと蓋は風で揺れ、今にも落ちそうになっている。取り外すのは難しくはなさそうだ。「ハッキングにどれだけかかるか分からない。あそこから私が行く」

「……」ガンドーは渋い顔をした。彼女の提案は確かにこの場での最適解であろう。しかし、ニンジャが存在するかもしれない場所にモータルであるラウラを送り込むのは探偵としても気の引ける決断ではあった。「心配ない、緊急になれば逃げに徹し瞬間加速を使用して音速で離脱する」

「……オーケー。いいか、ヤバイと思ったらすぐ逃げろ。そこらのサンシタでも、ニンジャは蹴り一発でアンタの首を折れると思え」せめてもの警句。「分かった」頷くとラウラは僅かな隙間に手を置き、するすると通風孔まで登ると蓋を外してガンドーに投げ渡した。「センセイを確認出来たら戻る。ガンドー＝サンはハッキングで開けられたら合流を」

そのままラウラはもぞもぞと這い進んでゆく。ガンドーは首筋を掻きつつ作業に戻った。依頼者にばかり仕事をさせては探偵としてもイチカ達に顔向けできない。せめてもの矜持だ。「待ってろよ、ラウラ＝サン」端子を差し込むと、ニューロンに０１の奔流が流れ込む。焦りを抑えつつ、ガンドーはセキュリティ・プログラムとの格闘を始めた。

ラウラは埃っぽい通風孔の中を這い進む。「……！」気配。動きを止め、息を殺す。ところどころ取り付けられた金網越しに、青いシートのかかった何かを台車で運ぶ白衣の研究員が通り過ぎるのが見える。それとすれ違う研究者も同じ顔、同じ髪型だ。「私は２０時間働いています」「私は３０時間です」相互認識めいた会話。

オペレーション開始前に見た工場内の構造を思い出す。とりあえず入口周辺の構造は改築などはされていないようだ。泊まり込みの従業員のための宿泊施設が外れにある。チフユが拘束されているとすれば、おそらくはその区画の可能性が高い。ラウラは細身の身体を這い進ませた。眼帯をずらして金眼を露わにし、僅かな気配も逃すまいとする。

通風孔内を何回か曲がり、やがて彼女は居住区画へ辿り着いた。従業員用の雑魚寝部屋は無視だ。居るとすれば上長用の個室。幾つもの分岐に分かれている通風孔をラウラは迷わず進む。一つ目の部屋は無人だった。そのままずり下がり、二つ目の部屋へ向かう。先の金網から光が漏れている。誰かが在室しているのは確定か。

ラウラの携帯ＩＲＣが光った。『ロック解除完了。侵入する』ガンドーからの通信。「居住区まで移動、人の存在あり。これから接触を図る」肩を動かさず、指だけの動きで返信する。そのままラウラは這い進み、金網まで到達した。部屋の中を覗き込む。飾り気のないベッドに、申し訳程度の鏡台、壁に備え付けられたＴＶに机と椅子、ティーサーバー。

実際、急な住人のために文字通りの急拵えで用意したような部屋であった。「ハイその対処法に最適な一本！　このドリンクの有効成分がスゴイ効く！」「ワースゴーイ！」その室内に一人、無味乾燥なヨロシサン提供の健康番組を流すＴＶを前に座る女性。パステルカラーの病院服を着せられた、２０代の黒髪の、見覚えのある顔。

（チフユ・センセイ……！）ラウラは声を殺して更に室内の様子を確認する。防犯カメラはあるか、集音装置はあるか。「……声は出せるぞ」「アイエッ!?」室内の女性が顔をこちらに向けずに言った。思わず声が出る。「ラウラか……顔は出すな。音は録らないがカメラはある。素晴らしきプライバシーの尊重だな」皮肉めいた笑み。

その様子は学校で彼女らに見せていた泰然とした態度と全く変わらない。ラウラは今すぐ救い出したい気持ちを抑え、チフユに言った。「やはりこちらに囚われていたのですね。オリムラ・センセイ」「囚われていたのではない。私は自分からここに来ただけだ」「……」予想通りの答え。「……お前ひとりで来た訳ではあるまい。協力者がいるな」

今度はチフユから問いかけてきた。「……」沈黙でラウラは返す。「その協力者に言っておけ、私は問題ない。これ以上は踏み込むなとな」「お断りします、センセイ。どの道この計画が遂行されればＩＳ学園は終わりです」ラウラは毅然と答えた。チフユの眉が僅かに動く。「そこまで知っているのか。腕のいい協力者だな」

「……」「イチカ＝サンは無事か？」「ＩＳ学園からは出さないようにしています」「……

そうか」安堵の笑み。「もう一度言うぞ、ラウラ＝サン。私は問題ない」「助けます」「死ぬぞ」静かな声。それは脅しなどでなく、淡々と真実を語るような響きだった。「……ニンジャ、ですか？」「幾らＩＳ適合者のお前たちでも、相手が悪い」

「そんな事はありません。私たちの力を集めれば……」「無理だ。何よりアレが開発されれば……」「クローンなど」「……？」その時、ごく僅かにだがチフユの表情が僅かに変わった。何かが食い違っている、そんな表情。「……センセイ？」突然、チフユがチャの入ったユノミを机に強く置いた。音が室内に響く。

「……！」咄嗟にラウラは呼吸を止め、僅かにずり下がった。フスマの開く音。「……ドーモ、チフユ＝サン」「ドーモ」別の女性の声。誰かが入って来た。「どうしたのだ、デコイ＝サン。今日の検査は終わった筈だが」「ＶＩＰの護衛も私の任務だ。見回りだよ」金網から見える姿。髪を結った、メンポを付けたスーツの女性。

「イヤーッ！」ＫＲＡＡＡＡＳＨ！　デコイは突然垂直にジャンプすると、高く脚を上げ天井を蹴り抜いた！　三倍の脚力が成すワザだ！　タイルの破片が室内に降りかかる。チフユはユノミに埃がかからないよう手を添えつつ、表面上は平静を保ったまま尋ね

た。「どうした?」「フム」天井に空いた穴を見つつデコイは小首を傾げた。「気配があったのだが」

「……」ラウラは眼前、数cm先に空いた穴を見詰めつつ息を呑んだ。あと少し下がる距離が短ければ、ＩＳを展開する間もなく彼女の胴体は蹴り上げられ、内臓を破壊されていただろう。「もう一度、部屋を汚させてもらう」下からのデコイの声。下がって間に合うか?ＩＳを展開して強行突破するか?　ラウラは一瞬の決断を迫られた。

ブガーブガーブガー!　その時、突然けたたましい警報音と共に廊下の赤色灯が光った。「侵入者、侵入者、警備担当は直ちに対応するドスエ」マイコ音声が流れる。「何?」デコイは眼を見開き、天井を一度見た後にチフユに振り向いた。「ここを動くな」そう言い残し、廊下を素早く走り去ってゆく。それを見送りつつ、チフユはチャを飲んだ。

「……アレがニンジャだ」「……」ラウラは答えない。「逃げろ」「……次は助けに来ます、センセイ」ラウラはそう言って、身体を後退させていった。「すまない。ラウラ＝サン」残されたチフユは、そう呟き天井の穴を見上げた。その表情には、隠しきれない寂しさが表れていた。

ＢＬＡＭ！　ＢＬＡＭ！「ザッケンナコラグワーッ！」「スッゾコラグワーッ！」研究員ヤクザ二名殺害！　ＩＲＣルーム内から躍り出たガンドーは周囲の状況を確認した。廊下の奥から走ってくる数人の足音。遮蔽物の無い廊下での一斉射撃はニンジャでも危険だ。「イヤーッ！」ガンドーは床を蹴り、その音の方に全速力で駆けだした。

「スッゾ!?」こちらに向かってくるとは思っていなかったのだろう。廊下の角を抜けようとしていたクローンヤクザ数名がプログラム外の行動に対応が遅れる。その隙を逃すガンドーではない！　「イヤーッ！」「「グワーッ！」」クローンヤクザ三名殺害！「チクショウ！　ヤベえぞ、こりゃあ……！」その表情には焦りの色が濃い。

裏口から潜入したガンドーはラウラがチフユとの接触に成功すると見込み、自身はＩＲＣルームで情報の吸い出しに取り掛かっていた。ＩＲＣチャットログから、本施設の状況やその目的の裏付けを取ろうとしたのだ。結果、ガンドーは新たな事実を知る事となった。そしてラウラの撤退を助けるために意図的にアラートを鳴らし、今に至る。

「イヤーッ！」廊下の奥から三回転ジャンプと共に現れる女ニンジャあり！　「イヤーッ

！」ガンドーの頸椎を的確に狙った蹴りをマグナムの銃身で受けると、両者はタタミ二枚の距離で向かい合った。「ドーモ、はじめまして。デコイです」女ニンジャ、デコイが先にアイサツを決める。「ドーモ、デコイ＝サン。ディテクティヴです」

ガンドーは銃身を合わせてオジギを返す。どのような状況であろうと、ニンジャ間のアイサツは絶対である。「ディテクティヴ？」その名を聞き、デコイの表情に険しさが増した。「その名、聞き覚えがあるな。ニンジャスレイヤーの腰巾着だったか」「腰巾着じゃねえよ」ガンドーは否定しつつピストルカラテの構えを取る。

「しがない探偵が何の用だ？」「人の事務所の上で喧しく何かやってるようなんでな、苦情を言いに来たのさ」二人の間の空気が歪む。その時、ガンドーのニューロンに直結させていた携帯ＩＲＣからのメッセージが彼の脳裏に流れた。「こちらラウラ、撤退完了」（……よし）今はまだ正面から乗り込む時ではない。準備が必要だ。

「ウオオオッ！」ガンドーの影から幾羽もの影で造られたカラスが出現する！ 「今日は日が悪いみたいだな……」更に出現するカラスが両者の視界を妨げる。「また来させてもらうぜ！」「イヤーッ！」その影を切り裂くようなデコイの蹴り！ しかし彼女が降り

立った時、既にそこにはクローンヤクザの死体しか残ってはいなかった。

「イヤーッ！」ラウラは屋外に出た直後に自身のＩＳを展開し、上空に高く飛んだ。左目の金眼でガンドーの姿を探る。やがてその眼は裏口から飛び出してきた巨漢の姿を捉えた。幾つもの銃声と共に弾丸がガンドーの背後に浴びせかけられる。「イヤーッ！」それを紙一重で避け、アパートの屋上に飛び上がる。更にそこから幾つもの屋根を越え、遠くへ、遠くへ。

駆けるようにカワラ屋根を走るガンドーをラウラは追い、暫く後に追いかける足音と銃声が収まった事を確認してガンドーはその足を止めた。ラウラもＩＳを解除し、同じカワラ屋根に降り立つ。「オツカレサマ、ガンドー＝サン」「ああ、そっちもな」ガンドーはそう答えると屋根に腰を下ろし、懐からＺＢＲ煙草を取り出すと火をつけた。

「首尾はどうだった？」「オリムラ・センセイを確認した。今のところ危害は加えられてないようだ」「ブルズアイか」頷くガンドー。ラウラは逆に尋ねた。「何か掴めたのか、ガンドー＝サン？」その言葉にガンドーの表情は曇った。「ああ。ヤツら、チフユ＝サンのクローン培養以外にもう一つ考えてやがった」

「それは？」更に聞くラウラに、ガンドーは煙草を一服すると顔を彼女に向けて言った。
「事によっちゃあ、こっちの方がヤバイかもしれねえ……ニンジャ専用ＩＳの開発だ」